OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『原子爆弾の下で』翻訳出版記念セミナー報告書 |
| Author(s) | 高橋, 明 |
| Citation | |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/61376 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# परमाणु बम की छाया में

## 『原子爆弾の下で』

## 翻訳出版記念セミナー

## 報告書

2017 年 5 月 5 日

制作：大阪大学外国語学部ヒンディー語専攻 印度民俗研究会

セミナー開催日： 2016 年 12 月 8 日

# 目次 विषयसूची


1. はじめに..... 1
2. 原爆詩集インドで出版..... 2
毎日新聞　大久保　昴

3. परमाणु बम कविता संग्रह भारत में प्रकाशित..... 3
हिंदी में अनूदित, अनुवादक मिकि यूइचिरो

3. 『原子爆弾の下で』 “परमाणु बम की छाया में” の刊行を祝して..... .5
大阪外国語大学名誉教授　古賀勝郎

4. ヒンディー語版原爆詩集の出版記念の会で..... 7
神戸市外国語大学元教授　和田幸子

5. “परमाणु बम की छाया में” の刊行を記念して..... 8
大阪外国語大学名誉教授　溝上富夫

6. “परमाणु बम की छाया में” の出版おめでとうございます..... 10
国際交流基金日本語国際センター　白井　桂

7. 原爆詩のセミナーに寄せて..... 12
金沢星陵大学准教授　小磯千尋

8. 『原子爆弾の下で』に耳を傾けよう..... 13
大阪大学外国語学部講師　松木園久子

9. “परमाणु बम की छाया में” 出版おめでとうございます..... 14
大阪大学言語文化研究科准教授　長崎広子

11. जापानी हिंदी काव्यानुवाद “परमाणु बम की छाया में” की अनुवादप्रक्रिया और अनुवादयोजना की पृष्ठभूमि पर कुछ निजी टिप्पणियाँ..... 15
दिल्ली विश्वविद्यालय, सहायक प्रोफेसर , डॉ. हरजेन्द्र चौधरी

12. 『原子爆弾の下で』日本語翻訳の背景と作業を振り返って..... 19
デリー大学准教授　ハルジェンドラ・チョードリー

13. 読者の皆さんへ..... 22
大阪府立大正高校教諭　三木雄一郎

14. मेरे प्रिय पाठको..... 29

ताइशो हाई स्कूल, वरिष्ठ अध्यापक,　मिकि यूइचिरो

15. “परमाणु बम की छाया में” को पढ़कर.....42

ओसाका विश्वविद्यालय, सहायक प्रोफेसर, डॉ. चैतन्य प्रकाश योगी

16.『原子爆弾の下で』を読んで（日本語訳）..... 49

大阪大学准教授　チャイタニャ・プラカーシュ・ヨーギー

17. “परमाणु बम की छाया में” को पढ़कर..... 54

ओसाका विश्वविद्यालय,　अशिमा मेहता

17.『原子爆弾の下で』を読んで（日本語訳）.....58

大阪大学日本語日本文化教育センター留学生　アシマー・メヘター

18.『原子爆弾の下で』を読んで.....61

ヒンディー語専攻４年生　岩瀬安奈

19. हमें सीखना चाहिए..... 63

ヒンディー語専攻３年生　中西　渉

20. いくつかの詩を読んで.....65

ヒンディー語専攻３年生　日高航洋

21. 原爆詩　ヒンディー語訳出版記念のセミナーに参加して.....70

ヒンディー語専攻２年生　中西優紀子

22.　セミナー進行の記録.....　72

ヒンディー語専攻２年生 後藤大輝, 中西優紀子

23. “परमाणु बम की छाया में” 恐れと救い.....74

大阪大学言語文化研究科教授　高橋　明

24.　写真.....85

撮影　ヒンディー語専攻３年生　中西　渉

25.　おわりに..... 87

# はじめに

広島、長崎の原爆の悲劇に題を取った日本語の詩 123 編をヒンディー語に翻訳した『原子爆弾の下で』（翻訳詩集の邦題）が、2016 年 8 月にインドの国立文学アカデミーから刊行されました。翻訳者はハルジェンドラ・チョードリー氏と三木雄一郎氏のお二人です。私たちはこの記念すべき出版を受けて、2016 年 12 月 8 日、共訳者のお一人、三木雄一郎氏を大阪大学箕面キャンパスにお招きして、外国語学部ヒンディー語専攻主催によるセミナーを開催しました。セミナーには、ヒンディー語専攻の卒業生である溝上富夫氏、和田幸子氏、松木園久子氏、大阪大学のインド人国費留学生アシマー・メヘター氏の他、小磯千尋氏、チャイタニヤ・プラカーシュ・ヨーギー氏、長崎広子氏など新旧のヒンディー語専攻所属の教員、そしてヒンディー語専攻の学生さんたちが参加しました。本報告書は、そのセミナーにおける発表を中心に冊子にまとめたものです。古賀勝郎先生、そしてもうお一人の共訳者であるチョードリー氏とその長年の友人である白井桂氏からいただいたご挨拶は、セミナーの場で本報告書作成者の高橋が僭越ながら代読いたしました。

次ページにありますのは、セミナーに先立ち、2016 年 11 月 10 日の毎日新聞夕刊に掲載された『原子爆弾の下で』の刊行を紹介する、大久保昴氏の筆になる新聞記事です。その次のページには、その記事を三木雄一郎氏がヒンディー語に翻訳された文章を収録しました。セミナーでは外国語学部の学生諸君が、会場設営から司会役、写真撮影役、そして発表と大活躍をしてくれました。これらすべてはヨーギー氏の熱心なご指導の賜物です。

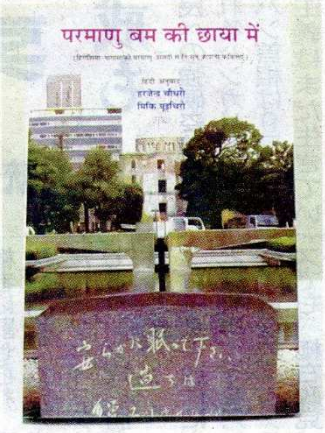
2015 年 7 月に本学を訪問された上記文学アカデミー総裁のヴィシュヴァナート・プラサード・トリパーティ氏を始め、今回の出版に当たってご尽力いただいたインドのみなさま、セミナーのために文章をお寄せいただいた方々、そして自らの原爆の悲惨な体験を、詩を通じて記録と記憶に残してくださった多くの原作者の方々とそれを見事なヒンディー語に翻訳したお二人の翻訳者に、心よりの敬意と感謝を込めて、本報告書をお届けします。

# 反核の叫び 世界に広がれ

## 原爆詩集 インドで出版

### デリー大准教授ら「次はパキスタンで」

インド・デリー大准教授のハルジェンドラ・チョードリーさん(60)と大阪府立大正高校の三木雄一郎教諭(57)が、広島と長崎の原爆投下についてつづった123編の日本語の詩をヒンディー語に翻訳し、インドで出版した。インドは隣国のパキスタンと対立し、両国とも核兵器を保有している。チョードリーさんは「広島と長崎の経験を知り、核兵器だけでなく戦争そのものに反対する考え方を詩を読んだ人たちに育んでほしい」と願っている。【大久保昂】




上2011年12月に広島を訪れたハルジェンドラ・チョードリーさん(左)と三木雄一郎さん=チョードリーさん提供 下出版されたヒンディー語の原爆詩集=大久保昂撮影

ヒンディー語はインドとしている国民が4億～5億人いるとみられる。詩集の題名は「パラマーヌバム・キー・チャーヤー・メン（原子爆弾の下で）」。「にんげんをかえせ」の詩で知られる峠三吉（1917～53）や詩集「原爆小景」で惨事を生々しくつづった原民喜（1905～51）、「生ましめんかな」の栗原貞子（1913～2005）ら、広島で被爆した著名な原爆詩人の作品を収録した。

長崎の被爆者では、原爆で両親と姉を亡くし、戦後は自らも原爆症に苦しみながら反核運動を続けた福田須磨子（1922～74）らの作品を収録。終戦直後に広島の小学生たちが書いた作品や、在日コリアンが原爆を題材にした詩なども幅広く取り上げた。

インド出身のチョードリーさんは1994年、大阪外国語大（現大阪大）の教員として来日。もともと核の問題に関心があり、原爆を題材にした詩を読むうち、「ヒンディー語に翻訳して母国で紹介したい」という気持ちが芽生えた。原爆投下から半世紀の節目だった95年8月6日には、同大の非常勤講師を務めていた三木さんと広島原爆資料館を訪れ、翻訳への思いを一層強くしたという。

96年に日本を離れた後、2010年に大阪大の教員として再来日。長年の思いを形にしようと、三木さんの協力を得て翻訳に取りかかった。休日などを利用し、三木さんが日本語の詩をヒンディー語に直訳した後、自らも詩人であるチョードリーさんが手直しする形で作業を進めた。12年春の帰国までに翻訳作業をほぼ終え、今年8月に詩集を出版した。

表紙には、自分たちが撮影した広島の原爆ドームの写真。前書きにはインドとパキスタンの対立を念頭に、「（翻訳した詩は）核を保有する地域や国々の市民たちに危険を気づかせ、危険を回避するために抵抗する民主的な精神が培われるだろう」と記した。チョードリーさんは「パキスタンで使われるウルドゥー語にも翻訳されればうれしい」と期待している。

# परमाणु बम कविता संग्रह भारत में प्रकाशित

माईनीची समाचार पत्र, 10 नवंबर, 2016, ओसाका, जापान

मूल जापानी से हिंदी में अनूदित, अनुवादक : मिकि यूइचिरो

नाभिकीय आयुध के खिलाफ यह पुकार दुनिया भर में पहुँचा दें !

दिल्ली विश्वविद्यालय के सहायक प्रोफेसर, श्री हरजेन्द्र चौधरी (उम्र 60) और ओसाका स्थित राजकीय ताइशो हाई स्कूल के वरिष्ठ अध्यापक, श्री मिकि यूइचिरो (उम्र 57) ने मिलकर हिरोशिमा और नागासाकी परमाणु बम त्रासदी से नि:सृत 123 जापानी कविताओं का हिन्दी अनुवाद पूरा करके उसे भारत में प्रकाशित किया। भारत और उसके पड़ोसी देश पाकिस्तान में फूट है और इन दोनों देशों के पास आज नाभिकीय आयुध हैं। चौधरी जी की इच्छा है कि 'ये अनूदित कविताएँ लोगों को हिरोशिमा-नागासाकी के त्रासदीपूर्ण अनुभव से आगाह करें और पढ़नेवालों के मन में केवल परमाणु-अस्त्रों के विरुद्ध ही नहीं, बल्कि युद्ध-मात्र के विरुद्ध एक धारणा उत्पन्न कर दें ।' (ओओकुबो अकीरा)

अगली बार पाकिस्तान में भी शाया हो तो....

हिन्दी भारत की सरकारी भाषाओं में से एक है और तकरीबन चालीस से पचास करोड़ नागरिकों की मातृभाषा भी है। कविता संग्रह का शीर्षक है 'परमाणु बम की छाया में'। इसमें तोगे सांकिचि (1917 - 53) जिनकी 'मनुष्यता लौटाओ' वाली कविता बहुत लोकप्रिय है, हारा तामिकि (1905 - 51) जिन्होंने कवितासंग्रह 'परमाणु बम, एक छोटा-सा दृश्य' में परमाणु बम त्रासदी का जीवंत चित्रण किया, कविता 'मैं बच्चा जनवाऊँगी' की रचयिता कुरिहारा सादाको आदि स्वयं हिरोशिमा में परमाणु बम के शिकार हुए सुप्रसिद्ध कवि / कवयित्रियों की रचनाएँ संकलित हैं। नागासाकी के उत्पीड़ितों में फुकुदा सुमाको (1922 - 74) आदि की कविताएँ भी संकलित हैं। फुकुदा जी के माता-पिता और बड़ी बहन की परमाणु बम से मृत्यु हुई और युद्ध समाप्त होने के बाद वे ख़ुद परमाणु-विकिरण से उत्पन्न रुग्णता से पीड़ित होते हुए नाभिकीय आयुध के खिलाफ आंदोलन में भाग लेती रहीं। युद्ध समाप्त होने के तुरंत बाद हिरोशिमा के प्राइमरी स्कूलों के बच्चों के

द्वारा लिखी गई कविताएँ, जापान में रहनेवाले कोरियाई मूल के रचनाकारों की कविताएँ आदि परमाणु-त्रासदी पर आधारित रचनाएँ विस्तृत क्षेत्र से इकट्ठी की गई हैं।

भारत में पैदा हुए चौधरी जी 1994 में ओसाका विदेशी भाषा विश्वविद्यालय (वर्तमान ओसाका विश्वविद्यालय) के विजिटिंग प्रोफेसर का दायित्व निभाने के लिए जापान आए। उनको शुरू से ही परमाणु-शक्ति के विषय में रुचि थी और परमाणु बम पर अनेक कविताएँ पढ़ने के क्रम में मन में यह इच्छा उत्पन्न हुई कि ' इन कविताओं को हिन्दी में अनूदित करके अपने देश के लोगों से परिचित कराएँ।' 6 अगस्त 1995 को हिरोशिमा की अर्धशती मनाए जाने के अवसर पर वे मिकि जी के साथ हिरोशिमा-शांति-संग्रहालय गए और कविताओं का हिन्दी अनुवाद करने का उनका संकल्प और भी दृढ़ हो गया। उन दिनों संयोग से मिकि जी भी उसी विश्वविद्यालय में हिंदी अध्यापन का कार्य संभाल रहे थे।

चौधरी जी 1996 में भारत वापस जाने के बाद 2010 में ओसाका विश्वविद्यालय के विजिटिंग प्रोफेसर की हैसियत से फिर जापान आए और वर्षों से मन में दबे संकल्प को पूरा करने के लिए मिकि जी के साथ अनुवाद-कार्य में जुट गए। बीच बीच में छुट्टियों का सदुपयोग करके मिकि जी ने जापानी कविताओं का हिन्दी में शब्दशः अनुवाद किया और चौधरी जी, जो स्वयं हिंदी के अच्छे कवि हैं, ने उनका संशोधन करके मसौदे को ऊँचे स्तर के कवितासंग्रह का रूप दे दिया। इस तरह दोनों का अनुवाद-कार्य चलता रहा। 2012 के वसंत में जब चौधरी जी भारत वापस गए तब तक अनुवाद लगभग पूरा हो चुका था और यह कवितासंग्रह अगस्त (2016) में प्रकाशित हुआ।

पुस्तक के आवरण में परमाणु बम गुंबद का वह फोटो छपा है जिसे स्वयं चौधरी जी ने हिरोशिमा में खींचा था। भारत और पाकिस्तान की फूट को ध्यान में रखते हुए भूमिका में ऐसा लिखा है कि '(इन अनूदित कविताओं के माध्यम से ) परमाणु-शक्ति-संपन्न क्षेत्रों और राष्ट्रों के नागरिकों के इस ख़तरे के प्रति आगाह होने के उपरांत इसे टालने वाली प्रतिरोधात्मक जनतांत्रिक मनोभूमि निर्मित होगी'। चौधरी जी का कहना है कि पाकिस्तान की कौमी ज़बान उर्दू में भी इस किताब का तर्जुमा हो जाए तो हम लोगों को बड़ी खुशी होगी।

# 『原子爆弾の下で』
# “परमाणु बम की छाया में”
# の刊行を祝して

古賀勝郎（Koga Katsuro）

この度、H. チョードリー先生と三木雄一郎先生のお二方が実に長い歳月を費やして、正に心血を注いで完成されたお仕事が『原子爆弾の下で』の形でインド共和国の文学院サーヒッティヤ・アカーデミーから刊行されたことはこのお仕事に何ら寄与することもなかった身ではありますが大阪外国語大学で長く勤務した縁で特別の感慨を覚え格別の喜びを授かった出来事でありました。

周知の通り三木先生にはこれまでに大部なヒンディー語小説の翻訳のほか南アジア関連の論文やベンガル語からの翻訳などを含め多数の御労作があります。この度、三木先生は、広島と長崎における原子爆弾の被爆経験者たちの世代が残した作品ばかりでなく現代の世代に至る詩人たちの作品まで実に丹念に探索・蒐集されチョードリー先生と共に余人には想像もつかないような御苦労を重ねて編纂・翻訳の偉業を達成されました。その過程は難渋を極めたものと想像されますが、それだけに比類のない画期的な成果になっているように思われます。

三木先生が学部卒業後、国語科の教師として精励勤務されるかたわら今日に至るまで幾十年に亘りヒンディー語の研鑽を続けてきておられることに私たちは驚嘆させられます。思い起こせば国語科教師の資格を得るために学部に更に 2 年間在籍して励まれていた時のこと、大阪外国語大学で日本語学を担当しておられた Y 教授が偶々同席した席で私に『三木君は…』と賞賛の言葉を掛けてこられたことがありました。Y 教授の評言にありました三木先生の該博な知識に加えて思索と読みの深さがこの度のお仕事にも遺憾無く発揮されているに違いありません。そして選ばれた詩を介して思索とその深い読みをヒンディー語で表現するにあたり共に力を尽くして下さった詩人チョードリー先生の豊かな感性と寛仁なお心があったればこそお二人の協同作業は美事に結実したものと思われます。この成果は今後サーヒティヤ・アカーデミーを介して英語ばかりでなく他のインドの主要言語にも翻訳されて行く上でとても重要な役割を果たすことになるものと思われます。更にはインド以外の国々の言語にも翻訳されて行くに違いあ

りません。

申すまでもないことですが、私たちはお二人の心を突き動かした主題の大きさや重さについて考えざるを得ません。人が四海同胞の意識を共有することの困難さを痛感させられる現今の世界的な状況はこの先いつまで続くのでしょうか。絶望的とも言えるかような時代に、そしてかような時代であればこそ敢えて希望の灯をかかげられたお二方の不抜の御覚悟と真の勇気に私たちは強く胸を打たれます。お二方の御努力は後に続く若い世代の方々に引き継がれてこそ真に結実するのだと考えられます。平和を希求するということはたとえ己の身命を削ってもあるいは犠牲にしても非暴力を貫くことでしかないと思われます。だが、翻ってその覚悟のほどを己に問うならば全く自信のない己の姿に愕然とするばかりであります。凡夫はせめてその第一歩をまずは真の勇気を持ちたいと心に念じることから踏み出すべきなのでしょうか。

2016 年 11 月

# ヒンディー語版原爆詩集の出版記念の会で

和田幸子（Wada Sachiko）

ヒンディー語でこのような詩集を刊行なされたこと、ほんとうに素晴らしいことだと思います。心からお祝いを申し上げます。

これまで詩集に仕上げられるには、きっと数々のご苦心をされたことと存じますが、三木様とチョードリー先生の熱意と勇気に感銘をうけずにはいられません。

この詩集を古賀先生からお送りいただいたとき、何十年ぶりかで、峠三吉の原爆詩集を読み返してみました（日本語で！）。長い原爆詩集を読みながら、時には余りの惨状の描写に胸が苦しくなりながらも、詩人の心の底に流れる人間愛と、だからこそ抑えられない怒りと苦しみをひしひしと感じ、改めて原爆の恐ろしさを思い起こしました。

丁度福岡に出張する機会がありましたので、翌日広島に立ち寄り、原爆ドームや平和記念資料館、そして数々のモニュメントを訪れて参りました。またこれまでは見逃していた学徒動員された青年の慰霊碑や小さな遺跡もあり、なんと多くの人々が命を失ったのかと思いますと、改めて悲しさというか悔しさがこみ上げてくるのでした。

私は、インド語学科（ヒンディー語）を半世紀も昔に卒業しました。同級生たちも、在学時代はあまり熱心に語学の勉強をしたとは言えないのですが、定年を遠に過ぎた今頃になって、「インドの映画が来たよ」とか「きっとうまくいく」「PK」などの情報をメールでやりとりしています。やはり青春時代のノスタルジアと重なってインドが忘れられないのですね。私も同じですが、インドの社会経済発展に関する研究テーマをいまだに追いかけています。時おり各地で講演をしますと、必ずインドの原子力政策についての質問をうけます。私は「仮に 100 万 kw の原発を 1 基、1 日稼働させれば広島の原爆 3 発分の核分裂物質が発生します」と答えます。要するに 1 年間で約 1000 個の原爆ができ上がるという事ですので、その恐ろしさに愕然としてしまいます。経済発展の裏側に積み上げられるこの恐ろしい事実に気がついた時、この詩集の叫び声を多くの人々に届けなければならなくなります。

実際にはインドが今懸命に取り組んでいるのが、原発というよりは太陽光や熱、風力、バイオマスなどの「再生可能エネルギー」の利用拡大計画です。たとえば、インドは「新エネルギー省」を新設し、世界に先駆けて「国際太陽同盟」の盟主となり、熱帯の国々のエネルギー利用のリーダーとして着実に実績を挙げて COP21 などでも世界的に高い評価を得ています。このように歴史の時間は着実に進んでいますが、人間の心は変わりません。今後、インドで、ひとりもこんな悲しい原爆の犠牲者など出すことないように念じながら、この詩集をインドの友人たちに紹介したいと思っています。

ご出版本当におめでとうございます、そしてありがとうございました。

# “परमाणु बम की छाया में”
# の刊行を記念して

溝上富夫（Mizokami Tomio）

H. チョードリー先生と三木雄一郎先生の共訳 *परमाणु बम की छाया में* の刊行を記念して、訳者のひとり三木先生を招いてのセミナーが開かれたのは、偶然 12 月 8 日－まさに原爆投下の最大の原因でもあり、日本の現代史で最大の事件「真珠湾攻撃」の日―でした。そこにご出席の方々の中で、その瞬間この世に存在しており、その時点から今日までずっと心臓の鼓動がやむことなく打ち続けている人というのは、私と和田様の二人だけでした。広島の悲劇はその 4 年後ですから、私にとっては、広島の悲劇はそれほど古い出来事のように思えないのです。もちろん直接原爆の被害にあったわけではありませんが（これは全く偶然です。私が神戸でなく広島に生まれていたら、犠牲になっていた可能性は極めて大です）、原爆体験者の経験を直接聞いたり、原爆の映画を見たり、「はだしのゲン」を読んだり、歌を歌ったり・・・と少年時代、青年時代を通じて広島の悲劇は私にとって日常的でした。

インド人はどうでしょう。確かに多くのインド人は原爆に関心を持っています。多くのインド人にとって、東京に次いで知られている日本の都市は大阪や神戸ではなく広島でしょう。日本へ来たら、広島へ行きたいというインド人は多いです。共訳者のチョードリー先生もその一人でした。三木先生も同じ広島県（福山市）ご出身です。

インド人に関心の深い原爆に関する詩集をヒンディー語に翻訳・出版するというアイディヤは素晴らしいことですが、原詩の感情をヒンディーで伝えるというのは簡単な仕事ではありません。散文の翻訳と違って、一定のリズム感も必要ですし、文化の違いもあって直訳のできない分野です。この困難を克服して、サーヒトヤ・アカデミー（インド文学院）という権威ある組織から出版されたことに対してお二人の先生に心からの敬意を表します。

翻訳の動機から、翻訳作業で経験された困難さを淡々と謙虚に語られる三木先生のお話は非常に感動的でした。昔から学生達がよく提起していたヒンディーを学ぶ意義（知識人のほとんどが英語を喋るインドで、ヒンディーの実用的価値はない、とかの）についての議論なんか吹っ飛ぶものでした。

インド人も原爆の悲劇について詩を書いています。有名なのは、バジパイ元首相の「広島の苦悩」というもので、「この凶器を発明した人は、この悲劇を予測したのか？」と迫る感動的な詩です。しかし、それは「詩人」としての感情であって、現実の「政治家」として1998年に核実験を強行したのは、そのバジパイ首相でした。国連安全保障理事会や先進諸国はインドを激しく非難し、経済制裁を課します。インドは当然激しく反発しましたが、日本に対してだけは比較的抑制的だったと言われています。やはり、唯一の被爆国という理解はあったのでしょう。いまでも、毎年8月6日にはインドの国会は原爆投下の犠牲者に1分間の哀悼の意を表明してくれています。しかし、現実の国際政治にあっては、インドは頑として、核拡散防止条約にも包括的核実験禁止条約にも署名を拒否しています。にも拘わらず、巧みな外交力で、まずアメリカからそして各国に続き、去る11月に日本から原子力協力をとりつけるのに成功しました。上の二つの国際協定を空洞化させかねません。このように、インド人の、原爆の犠牲者に対する同情の気持ちと現実の核政策との間には大きな乖離があります。外国の核の傘に守られていないインドとしてはやむを得ない事情もあるのでしょう。

原爆被害の詩を訳したからといって、インドが直ちに核実験停止に踏みこむことはないでしょう。しかし、一人でも多くのインドの読者がこの詩集を読んで心を動かされ、反核の気持ちを持ってくれるだけでも、この詩集出版の意義は大きいと思います。実際には、インド人は核の本当の恐ろしさを分かっていないのだと思います。「文は武よりも強し」であってほしいです。

とても素晴らしいセミナーにご招待いただきまして、ありがとうございました。ただ、これほど素晴らしいセミナーの利益は本来、将来を担う学生さんが一番享受すべきものであって、その割に出席者が少なかったことは惜しいなあと思いました。1回のアルバイトや部活には代えがたい貴重なセミナーでした。

# “परमाणु बम की छाया में”の出版おめでとうございます

白井　桂（Shirai Kei）

“परमाणु बम की छाया में”の出版おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

翻訳の中でもとりわけ難しいとされる詩の翻訳、さらには詩の選択や分類や章立て、そして出版に漕ぎつけるまでの交渉から校閲にいたる長い工程、さぞかしご苦労されたことと拝察いたします。

翻訳者の一人、ハルジェンドラ・チョードゥリー氏とはインド留学時代からの知り合いで、思い返せば 40 年近くの付き合いになります。ご存じのとおり、詩集や短編集を既に何冊か出し、文学的なセンスもヒンディー語の表現力も持ち合わせています。私自身、必要に迫られて何編かの日本の詩をヒンディー語にしてみたことがありますが、それをちゃんとした「詩」にしてくれたのは彼でした。ヒンディー語による原稿などはいつも彼に直してもらっています。

もう一人の三木雄一郎氏とは直接面識がないのですが、高校で国語を教えられる傍ら、ヒンディー語の教育や翻訳に携わり、日本文学にもヒンディー語・ヒンディー文学にも精通されていらっしゃいます。翻訳においては既にウペンドラナート・アシュクの小説”गिरती दीवारें” （邦題『崩れる壁』）を出版されています。

このようなお二人が膝を付き合わせ、額を寄せ合って翻訳・編集された今回の詩集、私のような者にとやかく言う資格はありませんが、まさにお二人の「血と汗の結晶」と言っても過言ではないでしょう。文学作品の翻訳にはこうしたそれぞれの母語話者、そして文学に精通している者同士の共同作業がいかに重要かは言うまでもありません。

このような困難な作業を可能にしたのは、原爆の恐ろしさ・悲惨さ、それを使ってしまった人間の「悲劇」をインドの読者に伝えたいというお二人の熱意でしょう。それは序文を読めば明かです。広島・長崎の名前は知っていても原爆の実態については知らないインド人がほとんであるという現状において、今回の出版は本当に意義深いことだと思います。お二人が望まれるように、この詩集がウルドゥー語にも訳され、同じ核保有国のパキスタンの読者の元にも届けられることを切に願っております。

今年はアメリカの詩人アーサー・ビノード氏が日本語で書いた詩集『探しています』のヒンディー訳（”मैं ढूँढ रहा हूँ”）も出版されました。また、先日は「日本文学作品のインド公用語への翻訳の現状：受容と鑑賞及び選抜作品の原文訳文の朗読会」という会も催されました。経済的な結びつきが徐々に強まっていくのに比し、文化面での交流が立ち後れている昨今の日印関係において、こうした本の出版や催し物が続いていくことを祈って、私のお祝いとさせていただきます。

2017 年 12 月 7 日

# 原爆詩のセミナーに寄せて

小磯千尋（Koiso Chihiro）

このたびはチョードリー先生と三木雄一郎先生による原爆詩の翻訳出版おめでとうございます。お二人の真摯な取り組みを拝見してただただ頭の下がる思いです。市井の方たちの魂の叫びをまとめた詩を翻訳するという作業は並大抵の努力ではなかったと思います。三木先生がおひとりおひとりの方々に翻訳の許可を願うお便りを書かれたというお話も胸に響きました。

チョードリー先生と三木先生お二人の長年にわたる深い信頼関係があってこそ実現できたプロジェクトだと思います。

本には広島と長崎の原爆投下について綴った123編の日本語の詩がヒンディー語に翻訳されています。「パラマーヌバム・キー・チャーヤー・メン（原子爆弾の下で）」のタイトルも秀逸です。峠三吉や原民喜などの著名な原爆詩人の作品とともに、終戦直後に広島の小学生たちが書いた作品や、在日コリアンの人たちが原爆を題材に書いた詩なども幅広く取り上げたところに、お二人の志の高さを感じました。

チョードリー先生は1994年、大阪外国語大（現大阪大）の教員として来日されました。以前から核の問題に関心があり、原爆を題材にした詩を読み進められるうちに「ヒンディー語に翻訳してインドで紹介したい」と思われたということです。原爆投下から半世紀の節目といえる1995年8月6日に、三木先生と広島原爆資料館を訪れ、原爆詩の翻訳への思いを強くされた経緯が本のまえがきに詳細に記されており、お二人の関係が窺い知れ興味深かったです。

チョードリー先生は1996年に日本を離れ、2010年に再び大阪大学の客員教授として再来日され、三木先生の協力を得て翻訳に取りかかられました。休日などを利用し、三木先生が日本語の詩をヒンディー語に直訳し、それをチョードリー先生とすり合わせをしながら手直しするという二人三脚で作業を進められたそうです。チョードリー先生が2012年に帰国されるまでに翻訳作業をほぼ終え、推敲に推敲を重ねられ、2016年8月に出版にこぎつけられました。チョードリー先生が日本におられるときに、原爆詩を翻訳をされているというお話は伺っておりましたが、このような地道な作業を続けられての翻訳とは知りませんでした。三木先生の緻密な翻訳術とチョードリー先生の詩人としての言葉への繊細さがなし得た見事な翻訳だと思います。決して難解ではなく、平易ながら読む者の心の琴線を震わせずにはおかない技は見事だと思います。涙なくしては読み進められませんでした。

インドで広く読まれることを確信しております。

# 『原子爆弾の下で』に耳を傾けよう

松木園久子（Matsukizono Hisako）

あれは小学校低学年の夏休みのことでした。宿題の読書感想文のために市立図書館へ行った私は、偶然手に取った原爆の絵本に目が釘付けになり、気づけば通路で最後まで読み通していました。溶けて流れる皮膚やぶら下がった目玉、やっとの思いで飛び込んだ川の水も熱湯で……。ただただ恐ろしく、気持ち悪く、見なければよかったと何度も思いました。その図書館のそばを通るたび、胸が塞がる思いでした。1980 年当時、原爆投下より 35 年。子どもの私にはピンと来ないほど長い年月で、高度経済成長を経た豊かな社会からは戦争ははるか遠い昔のことのように思えました。そんななか突然目にした原爆被害の惨状は、絵本とはいえあまりにショックでした。やがて自分の両親にも戦争体験があり、祖父が戦死していたことを聞き、あの戦争は決して他人事ではなかったのだと知りました。

時は流れ、今日ヒンディー語の詩という思わぬ形で原爆を知ることになりました。『原子爆弾の下で(परमाणु बम की छाया में)』の訳者ハルジェンドラ・チョードリー先生は、私の修士課程での恩師です。当時、阪神淡路大震災やオウム真理教によるサリン事件が立て続きに起こり、先生にとっての日本の思い出が暗いものになったのではと気がかりでした。豊かで、平和な日本を見ていただきたいという思いが私にはあったのです。しかし先生ご自身は三木先生の故郷でもあるヒロシマを訪問され、原爆の事実に目を向けられました。その後、日本の戦後の復興を讃えるとともに、若い世代は感謝しなければならない、と綴られたのです。先生の広く深い、日本へのまなざしを感じると同時に、私自身にとっては戦後と自分をつなげてくれる言葉でもありました。

『原子爆弾の下で』は、そんなチョードリー先生と三木先生だからこそなしえた大作です。翻訳のご苦労ももちろんですが、原爆詩に向き合う責任の重さははかり知れません。一方我が身を振り返れば、戦争にも核の脅威にも鈍感になっている日常に気づかされます。だからこそ、何度でも思い起こさなければならないのだと思います。私にとっての原点はあの絵本でした。あれは知るべき現実の地獄であり、恐怖は必然だったと感じるようになってからは、あの絵本との出会いに感謝しています。今『原子爆弾の下で』を手にして、人々の心の叫びにしっかり耳を傾けたいと気持ちを新たにしています。そしてこの本が一人でも多くの人のもとに届き、長く長く読み継がれることを、心から祈っています。

# “परमाणु बम की छाया में”出版おめでとうございます

長崎広子（Nagasaki Hiroko）

2016 年は、オバマ・アメリカ大統領が広島を訪問し、北朝鮮は核開発を進め、核をめぐる国際情勢が先の読めない状況にあるなか、日本の原爆詩がヒンディー語に翻訳されインド文学協会から出版された。この偉業を成し遂げた翻訳者ハルジェンドラ・チョードリー、三木雄一郎、両氏に心よりお祝いを申し上げたい。

ハルジェンドラ・チョードリー先生とは、創設間もない大阪大学外国語学部に客員教授として赴任された際に、同僚として、厳しいながらも温かく日本人学生を指導されるそのお人柄に触れる機会を賜った。また三木雄一郎先生は、旧大阪外国語大学ヒンディー語科をご卒業後高校で教鞭をとりながら、ウペンドラナート・アシュク作『崩れる壁』の日本語訳という困難な仕事に果敢に取り組まれた尊敬する大先輩で、時折お会いした際には穏やかな物腰で優しい言葉をかけてくださり、よく励ましをいただいた。そしてこの度出版された原爆詩のヒンディー語訳は、お二人の不屈の精神力によって紡ぎだされた珠玉の詩集である。インドでは英語で海外文学に触れる人々が多く、ヒンディー語翻訳による原爆詩の出版は、より多くの人々に原爆詩にこめられた思いを日本からインドへ届けるという意味で、その功績は計り知れない。核保有国であり、原子力開発に力を入れるインドで、さまざまな人々がこの一冊を手に取り、核の脅威を知ってほしいと願うのは、世界で唯一の被爆国に生まれた私たちに共通の思いだろう。

またこの出版は、大阪外国語大学と大阪大学のヒンディー語科の卒業生と在校生にとって最高の贈り物となった。ヒンディー語科を卒業しても、ヒンディー語の知識を職業として役に立てる機会が非常に少なく、翻訳で生計をたてることも難しいなかで、大学からの卒業がヒンディー語学習の終わりではないことを、三木先生は身をもって示して下さった。日本語からヒンディー語へ、しかも詩を翻訳することは、ヒンディー語の小説を日本語に翻訳するよりもはるかに困難な作業である。日本語の原爆詩の味わいをきちんと残しながら、自然なヒンディー詩として紡ぎあげられた本作は、三木先生とチョードリー先生が渾身の力を注がれたものである。たとえ険しい道であっても、これからもヒンディー語の卒業生がお二人に続いていかれることを願っている。核のない平和な世界を願いつつ、出版のお祝いの言葉に代えさせていただく。

# जापानी हिंदी कव्यानुवाद “परमाणु बम की छाया में” की अनुवादप्रक्रिया और अनुवादयोजना की पृष्ठभूमि पर कुछ निजी टिप्पणियाँ

डॉ. हरजेन्द्र चौधरी

मित्रो! सबसे पहले मैं आप सब के प्रति अपनी कृतज्ञता व्यक्त करना चाहता हूँ कि आप लोग भारत में छपी इस पुस्तक पर यहाँ ओसाका में संगोष्ठी कर रहे हैं। इस संदर्भ में मैं अपने पौने चार दशक पुराने मित्र ताकाहाशि जी का विशेष रूप से आभारी हूँ। यह पुस्तक आज से लगभग चार महीने पहले, अगस्त के पहले सप्ताह में साहित्य अकादेमी द्वारा प्रकाशित की गई थी। भारत में अभी तक इस पुस्तक को लेकर औपचारिक लोकार्पण या विचार-विमर्श जैसा कोई आयोजन नहीं हो पाया है, इसलिए यहाँ जापान में हो रही इस संगोष्ठी का विशेष ऐतिहासिक महत्त्व है।

आज मैं आपको एक खुले राज़ की बात बताता हूँ। हम भारतीय लोग दुनिया में कहीं भी बस जाएँ, भारत सदा हमारे दिलों में बसा रहता है। हम कहीं की भी मिट्टी और हवा-पानी के बलबूते फल-फूल रहे हों, हमारी जड़ें भारत की ज़मीन में ही गड़ी रहती हैं। दुनिया-भर के अनेक देशों में बसे भारतीयों के लिए, कम से कम उनकी पहली-दूसरी पीढ़ी के लिए भारत एक स्थायी संदर्भ बना रहता है। मेरे लिए भी रहा है। अपने पहले जापान-प्रवास के दौरान के कुछ अनुभवों का ज़िक्र करके अपनी बात स्पष्ट करना चाहता हूँ। ओसाका विश्वविद्यालय के मेरे तत्कालीन सहकर्मियों को याद होगा कि 1995-1996 के दौरान जापान की दो प्राकृतिक आपदाओं ने विशेष रूप से हमारा ध्यान खींचा था। जापान के एक बड़े टापू पर पानी की ज़बर्दस्त कमी के कारण एक बड़ी आबादी संकटग्रस्त

थी और दूसरे कोबे के महाभूकम्प ने भयंकर तबाही मचाई थी। तब भारत में बिजली या पानी की कमी जैसी समस्याएँ आम थीं, पर जापान में जल-अभाव का होना सम्भवतः एक असाधारण घटना थी। 1996 में अपनी प्राध्यापन-अवधि पूरी करके भारत लौटने से पहले तत्कालीन ओसाका विदेशी भाषा विश्वविद्यालय द्वारा छापे गए संक्षिप्त 'फ़ीडबैक' में जापान में हुई पानी की कमी का ज़िक्र करते हुए मैंने टिप्पणी की थी कि एक युवा जापानी विद्यार्थी जिस देश की भाषा की पढ़ाई करता है, उसे उस देश को ठीक से समझने के लिए वहाँ के लोगों की समस्याओं के प्रति जागरूक व संवेदनशील होना चाहिए। प्रकृति हमेशा किसी पर मेहरबान रहे, यह ज़रूरी नहीं है। वह समस्त प्राणियों पर अपने संसाधन लुटाती भी ख़ूब है और कभी-कभी आपदा बरपा कर उनका सब कुछ लूट भी लेती है। भौगोलिक रूप से जापान टापुओं का देश है, साथ ही यह भूकम्पों वाले देश के रूप में भी जाना जाता है। 17 जनवरी 1995 को सुबह लगभग पौने छह बजे आए हाँशिन-महाभूकम्प के विनाशक प्रभावों का एक सीमा तक मैं भी साक्षी रहा हूँ।

जापान में रहते हुए भारत मेरे लिए एक स्थायी संदर्भ इस रूप में बना रहा कि इस तरह की तमाम घटनाओं के बाद मुझे हमेशा ख़्याल आता था कि यदि भारत में ऐसा हो तो क्या होगा। कोबे वाले भूकम्प जैसा कोई भूकम्प बीस के बजाय केवल दस सैकेंड के लिए दिल्ली जैसे शहर को हिला डाले तो निश्चित है कि मृतकों की संख्या पाँच-छह हजार नहीं, बल्कि लाखों में होगी।

मनुष्य प्रकृति को आंशिक रूप से ही नियंत्रित कर सकता है, इसलिए प्राकृतिक आपदाओं के लिए उसे पूरी तरह ज़िम्मेदार नहीं ठहराया जा सकता। परंतु कुछ गतिविधियों के लिए शत-प्रतिशत मनुष्य ही उत्तरदायी होता है। युद्ध और उसके फलस्वरूप होनेवाले विनाश का पूरा दायित्व मनुष्य का ही है। हिरोशिमा-नागासाकी पर गिराए गए परमाणु-बमों से होने वाले महाविनाश के उत्तरदायित्वों से भी उसे मुक्त नहीं किया जा सकता। 06 अगस्त 1995 को मैं मिकि यूइचिरो जी के साथ हिरोशिमा गया। वहाँ के शांति-संग्रहालय को देखने के बाद परमाणु बम द्वारा बरपाए गए कहर के बारे में जानकारी में तो इज़ाफ़ा हुआ ही, मेरे भीतर यह विचार भी कौंधा कि अगर परमाणु-सम्पन्न भारत में किसी लापरवाही या युद्ध के फलस्वरूप परमाणु-विस्फोट हो

जाए तो कितना अभूतपूर्व महाविनाश हो सकता है। तब भारत परमाणु-शक्ति-सम्पन्न देश था, पर पाकिस्तान नहीं। भारत ने सन 1974 में अपना पहला परमाणु-परीक्षण किया था और 1998 में कुछ और परीक्षण किए। इसके कुछ सप्ताह बाद हमारा पड़ोसी पाकिस्तान भी 1998 में ही, निरंतर छह परमाणु-परीक्षण करके घोषित रूप से परमाणु-शक्ति-सम्पन्न देश बन गया। आज दक्षिण एशिया के ये दोनों देश नाभिकीय अस्त्रों से लैस हैं और इनके बीच न्यूनाधिक तनाव प्रायः बना रहता है। किसी लापरवाही या गम्भीर चूक से परमाणु-दुर्घटना की आशंका के अलावा युद्ध की स्थिति में एक-दूसरे के विरुद्ध या किसी आतंकवादी समूह द्वारा परमाणु हथियारों के प्रयोग की आशंका निरंतर बनी ही रहती है। यूँ तो ऐसी आशंकाएँ विश्वव्यापी हैं, पर वर्तमान हालात को देखते हुए दक्षिण एशिया के मामले में कहीं अधिक गहरी हैं। आप समझ सकते हैं कि मुझ भारतीय के लिए भारत यहाँ भी स्थायी संदर्भ के रूप में सामने है।

मित्रो! दुनिया में कहीं भी युद्ध क्यों हो? विनाशक अस्त्र-शस्त्रों का निर्माण और इस्तेमाल क्यों हो? हिरोशिमा-नागासाकी जैसी त्रासदी की पुनरावृत्ति क्यों हो? इसी प्रश्नाकुल-वैचारिक पृष्ठभूमि में हिरोशिमा-नागासाकी सम्बंधी जापानी कविताओं को हिंदी में अनूदित करने की यह योजना बनी और पूरी हुई। मिकि जी मेरी इस योजना को सिरे चढ़ाने के लिए सहर्ष तैयार हो गए। उन्होंने अनेक स्रोतों से मूल कविताएँ खोज-खोजकर उनको हिंदी में अनूदित करना शुरू किया। मैंने बीच-बीच में अँगरेज़ी के चप्पुओं के सहारे अनुवाद की नाव को आगे बढ़ाने की कोशिश की। फिर ओनोहारा-हिगाशि में लम्बी-लम्बी बैठकों में सुदीर्घ विचार-विमर्श के फलस्वरूप हम कविताओं के हिंदी-अनुवाद को लगभग अंतिम रूप देने लगे। ऐसा नहीं है कि मैं और मिकि जी अनुवाद के पहले या दूसरे प्रारूप पर हमेशा सहमत रहे हों। कभी मेरे लिए जापानी सोच के किसी बिंदु या संदर्भ तक पहुँच पाना दूभर हो जाता था तो कभी मिकि जी को हिंदी की कोई अभिव्यक्ति जापानी मूल से कुछ दूर हटी हुई या बहुत दूर छिटकी हुई जान पड़ती थी। कभी मिकि जी के दृढ़ संकल्प के आगे हार मानकर मुझे भाषायी ख़ूबसूरती का मोह त्यागना पड़ता था और कभी-कभी जापानी मूल के करीब पड़ने वाले मेरे हिंदी रूपांतरों के बदले मिकि जी शब्दशः अनुवाद के आग्रह को छोड़ देते थे। कभी एक-एक पंक्ति कई-

कई घंटे खा जाती थी तो कभी कोई जापानी कविता एक घंटे से भी कम समय में अंतिम और संतोषजनक हिंदी-रूप में अवतरित हो जाती थी। इस तरह सहमतियों और असहमतियों के बीच विचार-विमर्श करते हुए हमने अंतिम व अभीष्ट रास्तों की खोज की। मेरे जापान रहते यह सिलसिला 2010 से 2012 के दौरान लगभग पौने दो साल चला। इसी दौर में मिकि जी ने अनेक स्वत्वाधिकारियों से सम्पर्क साधने व अनुमति प्राप्त करने का व्यावहारिक दायित्व भी निभाया। मेरे भारत लौटने के बाद अनुवाद-कर्म का सिलसिला ई-मेल संदेशों द्वारा चलता रहा। अंततः सितम्बर 2013 में हमने लम्बी भूमिका व रचनाकारों के संक्षिप्त परिचय सहित 123 कविताओं की पाण्डुलिपि तैयार करके प्रकाशनार्थ साहित्य अकादेमी के सुपुर्द कर दी। लगभग तीन वर्ष लम्बी प्रतीक्षा के बाद अगस्त 2016 के पहले सप्ताह में पुस्तक छपकर आई और आज 08 दिसम्बर, 2016 को इसपर आप ओसाका में विचार-विमर्श कर रहे हैं। ताकाहाशि जी द्वारा प्रस्तुत मेरे इन शब्दों को आप अपने इस आयोजन में मेरी सक्रिय भागीदारी समझें। आप सबका हार्दिक आभार!

# 『原子爆弾の下で』翻訳の背景と作業を振り返って　　（日本語訳）

ハルジェンドラ・チョードリー

(Harjender Chaudhary)

みなさん。まず始めにインドで刊行されたこの翻訳について、みなさんが大阪でセミナーを開かれることについて、お礼を申し上げます。40 年も昔からの私の古い友人である高橋さんには感謝しています。この本は、今から 4 ヶ月前の 8 月の最初の週にインドの文学アカデミーから出版されました。インドではまだこの本について公式の記念式典や研究会は開かれていません。ですから日本で開かれる今回のセミナーには、特別の歴史的意味があると考えています。

これから、「公然の秘密」ということについて少しお話しようと思います。私たちインド人は世界のどこにいても、インドのことを忘れることがありません。どこの土地や空気の中で生きていても、その根っこは常にインドにあります。世界中の多くの国に暮らしているインド人にとって、少なくとも一世や二世の世代の人にとって、インドはどんなときでも変わらない原点になっています。私にとってもそうでした。私が最初に日本に暮らしたときの自分の経験を基に詳しくお話ししましょう。大阪大学の当時の同僚の先生方は覚えていらっしゃるでしょうが、私が日本に最初に滞在した 1995 年から 1996 年の間に起こった二つの悲劇的事件を思い出します。一つは水不足で多くの人々が苦しんだこと、そしてもう一つは神戸を廃墟にした大地震でした。その頃は、インドでは水や電気が不足するという問題が日常的にありました。しかし、日本で水が足らなくなるというようなことはまず起こりえないことでした。1996 年に勤務を終えてインドに帰国する際に、当時の大阪外国語大学から発行されていた「ひろば（外大ニューズレター）」に私は水不足のことにふれてこう書きました。「若い日本人学生が自分が勉強している言葉が話されている国のことを理解するためには、その国の人々の問題について目を向け、共感できるようでなければなりません」と。自然は人に常に優しいとは限りません。自然はすべての人間にその資源を惜しみなく与えます。しかし、時に災いを及ぼしすべてを奪い去ってしまうこともあります。日本は島国です。また地震国でもあります。1995 年 1 月 17 日の朝、5 時 45 分に起こった阪神淡路大震災の一端を私自身も経験しました。

日本で暮らしていてもインドが常に私の根幹にあったことから、こういったすべての出来事の後、もしインドで同じようなことが起こったらどうなっていただろうといつも考えたものでした。神戸のような大地震が 20 秒どころかわずか 10 秒であっても、もしデリーを襲っていたなら犠牲者は数千人ではすまず、おそらく何十万人という数になったでしょう。

人間が自然をコントロールできるのは、ほんのわずかに過ぎません。ですから自然災害について人間にすべての責任を負わせることはできません。しかし、人間に 100%の責任があるような事柄も中にはあります。戦争やその結果としての破壊についての責任はすべて人間にあります。広島と長崎に落とされた原爆によってもたらされた惨劇の責任を人間は逃れることはできません。1995 年 8 月 6 日、私は三木雄一郎さんと一緒に広島を訪ねました。広島の平和記念館を見たあと原爆が招いた悲劇についての知識は確かに増えました、と同時に核兵器を保有するインドで何らかの不注意、あるいは戦争の結果として核爆発が起こったら、それまでに経験したことのないような大破壊が生じるのではないかという恐れが私の胸中に広がりました。その頃、インドはすでに核兵器保有国でした。しかし、パキスタンはまだそうではありませんでした。インドは 1974 年に最初の核実験を行いました。1998 年にもさらに実験を実施しました。その数週間後、隣国のパキスタンも 1998 年に続けざまに 6 回の核実験を行い、自らも核兵器保有国であることを明らかにしました。現在、南アジアのこの二つの隣国は破滅的な核兵器を配備し、両国間には多かれ少なかれ緊張関係が続いています。何らかの不注意あるいは重大なミスによって核事故の恐れがあるだけではなく、戦争が勃発したり、あるいはテロリスト集団による核兵器の使用という懸念が常につきまとっています。こうした恐れは世界中にあります。しかし、現在の状況を見ると南アジアの問題がもっとも危険ではないでしょうか。この問題についてみても、インドが私のものを考える際の基準になっていることがおわかりいただけると思います。

みなさん、世界にはどうして戦争が起こるのでしょうか。人間は破滅的な核兵器をなぜ作り、またなぜそれを使用するのでしょうか。広島と長崎のような悲劇が再び繰り返されるようなことがあるのでしょうか。この終わりのない疑問を背景にして、広島と長崎についての日本語の詩を翻訳するというこの試みが完成しました。三木さんは私のこの計画を達成させるために喜んで協力してくださいました。三木さんは手立てを尽くして、原作を探し出し、ヒンディー語への翻訳を始めました。私は英訳という櫂の助けを借りながら翻訳という船を前に漕ぎ進めるよう努めました。そして、小野原東の私の宿舎での長い共同作業の果てに、私たちはこの詩のヒンディー語訳という仕事にほぼ最終的な姿を与えることができました。

私と三木さんが、日本語の詩からヒンディー語の詩へとその姿を変えていく過程で、常に意見が一致していたということではありませんでした。ときに私にとって日本人の考え方を理解し、その背景にあるものを捉えることが難しいことがありましたし、三木

さんにとってヒンディー語の表現が元の日本語と遠く離れてしまっていると思えることがありました。あるときは、三木さんの強い主張の前に私が譲歩し、ヒンディー語にとっての言語の美しさを犠牲にせざるを得ないことがありました。また、三木さんが日本語に忠実な翻訳をあきらめざるを得ないこともありました。一行を翻訳するのに何時間もかかることもありましたし、一時間もたたないうちに一編の詩を満足できるヒンディー語に翻訳し終えることもありました。こうした見解の一致と衝突とを繰り返しつつ議論を重ねながら、私たちは最後のそして望ましい姿への道を辿っていきました。私が2010年から2012年に日本に滞在する2年近くの間、この作業が続きました。この間、三木さんには版権所有者である方々と接触して翻訳出版の了解をえるための実務作業を引き受けていただきました。私がインドに帰ってからは、翻訳作業は電子メールを介して続けられました。そして、2013年の9月に長い序文と原作者についての短い紹介文を付して、123編の詩の翻訳原稿をインド文学アカデミーに託しました。それから3年近くの長い時を経て、2016年8月の最初の週に本は出版されました。本日、2016年12月8日、みなさんは大阪で意見を交わしていらっしゃいます。みなさんが意見を交わすその場に、高橋さんによって私の言葉も届けられることでしょう。私からの深い感謝の心とともに。

# 読者の皆さんへ

三木雄一郎（Miki Yuihiro）

皆さん、こんにちは。大阪府立大正高校で国語の教師をしております、皆さんからみると遠い先輩にあたる三木雄一郎と申します。どうかよろしくお願いいたします。私が大阪外国語大学のヒンディー語科に入学したのは 1977 年（昭和 52 年）でして、昭和は遠くなりにけりですが、40 年ほどの歳月も過ぎ去ってみるとあっという間のことのように思えます。当時は今日お越しの溝上先生が三十台半ばでまさに油の乗り切った少壮の助教授。全身から知恵とエネルギーをほとばしらせておられ、課外では気さくに学生に話しかけられる一方、授業ではびしびし生徒を鍛えるたいへん厳しい先生でいらっしゃいました。また２年上の学年には高橋先生がおられて、当時マーラヴィーヤ先生というインド人の先生がいらっしゃり、私たち学生は男女の区別なく君づけでよばれましたが、高橋先生だけはさんづけされていて、ヒンディーの作文の授業でわからない言葉が出てくるとそのインド人の先生が「高橋さんに聞いてみよう。高橋さんはなんでも知っている、サブ・クチュ・ジャーンテー・ハエン」というすでにして伝説のような方でした。そういうたいへん優秀な尊敬すべき先生方や諸先輩、友人に恵まれて、私もヒンディー語科の王道を歩み、学部で 6 年間ヒンディーを勉強する機会に恵まれました。その後、大阪府立高校に就職してからも、性懲りもなくと言いますか、下手の横好きで、趣味としてヒンディー小説の翻訳の真似事などをしてきて、気がついてみればこの年になっていたという次第です。

本日はハルジェンドラ・チョードリー先生との共訳でこの 8 月にインドで出版されました「パラマーヌバム・キー・チャーヤー・メン」について、翻訳出版に至る経緯とその過程で私の感じたことをお話したのちに、この本には載っていない長崎での被爆体験を題材とした俳句をご紹介して、翻訳の実際に触れていただければと考えています。

話は 1995 年、今から 21 年前にさかのぼります。皆さんはまだご幼少の砌ということになりましょうか。チョードリー先生は当時の大阪外国語大学、外大のヒンディー語科の外人教官を務めておられましたが、8 月 6 日に広島を訪ねたいので三木君、君は広島県出身なのでぜひ案内してほしいとおっしゃいます。インドの知識人は核の問題についてたいへん関心の高い方が多く、広島・長崎というのはある種の聖地になっていて、日本へ来たからにはぜひ訪れたい場所のひとつになっているようです。そこでまず前日の 8 月 5 日に私の故郷、広島県東部の福山市の果てにある農村に来ていただきました。

持ち前の好奇心を発揮して村の中をあちこち歩き回られるものですから、当時田舎では外国人の姿を見ることはまだ珍しく、ましてインドの方がわが村を訪ねるなど初めてのことですから、あの人はいったい何者だと方々で怪しまれる一幕もありました。その日は家に泊っていただき、翌日の朝広島へ向かいました。ところがそれほど楽しみにされていたにもかかわらず、翌 8 月 6 日の朝私が寝坊するかどうかして出発が遅れ、広島の平和記念公園に到着したときにはすでに式典は終了していました。そのときのことを、この本の序文にも「広大な公園には空いた椅子がむなしく並んでいた」と書かれているんですが、どうもその「むなしく」という辺りにチョードリー先生の無念さと私に対する恨めしい気持ちがこもっているようで、読むたびに胸がちくっといたみます。その後、ふたりで原爆資料館を見学したのですが、ひとつひとつの展示物に足をとめて非常に熱心にご覧になっていました。よほど、そろそろ出た方がよくありませんかと口元まで出かかったほどです。そのあと、宮島へも参りましたが、原爆資料館で時間をかけたので、島にわたったときにはさすがに長い夏の日もかげってきていたのを覚えています。この 95 年夏の広島訪問でチョードリー先生が非常な感銘を受けられたことはわかりましたが、そのときは原爆詩の翻訳というような話も出ることはなく、翌 96 年 3 月に先生はインドに帰国されました。

次に来日されたのが 6 年前、2010 年です。このときはもう外大でなく、皆さんと同じ阪大ですね。チョードリー先生も最初の来日のときは、奥さんと二人の小さい子供さん同伴でそのお世話もあってお忙しそうでした。もう時効でしょうから申し上げますが内緒でラーメンを召し上がったときも、これは奥さんには絶対言うなと口止めされるなど色々気をつかわれる場面も多かったようです。でも 2 度目はいわゆる単身赴任で自由になる時間をたっぷりもたれていましたし、多少暇を持て余されるということもあったかもしれません。で、来られてすぐ 4 月か 5 月に小野原のお宅に御挨拶に伺いますと、早速その時に「広島・長崎の原爆に関する詩をヒンディーに翻訳したい。そのような訳詩集は英語にはあるが、ヒンディーではまだ見ないし、たいへん有意義なことと思う。今度日本へ来るにあたって、友人たちからも強く勧められているのでぜひ協力してほしい」と言われました。ま、正直弱ったなと思いました。日本語からヒンディーへの翻訳となると、ヒンディーから日本語への翻訳にくらべて何倍もたいへんで、正直それほどの力は自分にないし、身も蓋もない言い方をしますと面倒くさいじゃないですか。「うーん」と思ったけれど、わずか 3 分後ぐらいにはあえなく説得されていました。忙しいとか何とか言って断ればよかったんですけど、なぜ「はい」と言ってしまったのか、その理由を後付けになりますがいくつかあげてみます。まずは原爆詩をヒンディー語に翻訳して紹介することは単純に考えてよいことだろうということです。外国の方が原爆の問題に関心を持たれるのはありがたいことだし、さらに詩の翻訳まで思い立たれるのはたいへん志の高いことだと思いました。一方わが身を振り返りますと学生時代はもちろん、その後もヒンディーの小説の翻訳などをする過程で多くのインド人にお世話になり

ました。しかも一方的にお世話になるばかりでしたので、少しは恩返しをしなきゃいかんのじゃないかと考えたことがあります。それと先に申しましたように私は広島県の出身でして、小学校の頃には夏休み中 8 月 6 日に登校日というのがありまして、その日は朝礼で校長先生から午前 8 時 15 分、20 数年前の今日この時刻広島に原子爆弾が投下されましたというような話をずっと聞かされてきました。私自身とりわけそういう問題に関心があったわけでもありませんし、原爆資料館を訪れたのもチョードリー先生をご案内したときが初めでというぐらいぼんやりした人間ではあるのですが、それでも核兵器はなくすべきだというごく素朴な考えはもっていました。先生の方も、私のそういう気持ちまでつかんだ上で、説得にかかっておられるわけです。ですからちょっと断りにくいんです。さらに、ここでもし断ったら先生がどう思われるだろうか、ということも考えました。私がだらしない人間と思われるのはよいとして、戦後生まれの日本人の核や原爆についての意識はその程度のものかと思われる惧れがないでしょうか。広島や長崎には、有名人でないごく普通の市井の人で表には出てこないけれど被爆についての深い思いを抱いて生きておられる方が今も大勢いらっしゃるだろうと想像できます。私が断ることで、ひょっとするとそうした方々の思いを置き去りにすることになるかもしれないわけです。ま、そこまで言うと少し大袈裟すぎるにしても、日本人は勤勉だと聞いていたが肝心のときに寝坊するだらしない奴もいる、ということでそうでなくても評判を落としていますので、私のせいでこれ以上日本の印象を悪くしないためにも、ここはお引き受けするよりないだろうと考えました。私たちが自分なりに抱くある国のイメージや国民の像はたまたま接する機会のある個人を通して形作られる場合が多いと思います。それを裏返せば、相手もまた私たちという個人を窓として、日本という国をうかがい、日本人像を描こうとしていることになります。もっとも外国語学部の学生として日ごろから色々な国の方と接しておられる皆様には、このようなことはことさら申し上げるまでもなく、すでにお気づきのことに違いありません。少々素朴で無邪気すぎるものではありますが、以上が原爆詩の翻訳に協力しようと思った動機のようなものです。

次に具体的な翻訳作業の進め方について、お話します。ひと口に原爆詩と申しましてもチョードリー先生はもちろん私もまったく知識がありませんから、まずは資料探しから始めました。学生時代からなじみの、市内西区の西長堀というところにあります大阪市の中央図書館を訪ねました。原爆関係というとやはり古いものが多く、1970 年ごろ大原三八雄さんという方の編集された「日本原爆詩集」という本、それからチョードリー先生は英語がご堪能ですから、やはり大原さんの「英訳原爆詩集」、そして比較的新しいもの、といっても 1998 年の出版ですが、吉永小百合さんによる朗読で有名になった「小さな祈り」「第二楽章」という絵入りのきれいな二冊の詩集があります。これらを手当たり次第に借り出して、ぼつぼつ翻訳を始めました。吉永さんが朗読された詩を今ヒンディーに直している、そう思うだけで結構満たされる気分でしたね。学校をさぼってまでアイドルのコンサートへ出かけるけしからん生徒の気持ちが少しだけわかる

気がいたしました。だいたい二週間に一回のペースでチョードリー先生の小野原の宿舎へ私がお邪魔するという形で 2010 年 5 月から 12 年 2 月まで、ほぼ 2 年近くにわたって翻訳作業を続けました。辞書をたよりに私が日本語から直訳したものにチョードリー先生が手を入れて、というよりも大胆にメスをふるって、それはそれは見事なヒンディー語の詩に仕上げてくださいます。ですから私の下訳は、それこそ完膚なきまでに叩きのめされてほとんど原形をとどめることはありませんでした。その際たいへんお世話になりましたのが本日メッセージを頂戴しました古賀勝郎先生の編纂された「日本語・ヒンディー語辞典」です。私どもが学生の頃のヒンディー語作文というと、まず「和英辞典」で英語を出して、それから「英語・ヒンディー語辞典」を引く、というたいへん手間のかかる作業をしておりました。今日は学生の皆さんが立派なヒンディー語で司会をしたり、発表したりして会の運営にあたって下さっていますが、その原稿はどのようにして準備されたのでしょうか。私どもの頃は、「和英」「英ヒン」と二つの辞書を引いているうちにどんどん意味がずれていって、前の晩苦労してようやく仕上げたものを教室で発表すると、インド人の先生から酔っぱらって書いたのか、と毎回こてんぱんにやっつけられるというまるで漫画のようなことをしておりました。ですが、今はそのような苦労をすることなく、まずほとんどの単語が引けて、しかもどんぴしゃりの訳語が出てくるという思えば魔法のような辞典を手にすることができたのです。この宝物をどれだけ使いこなせたかはともかく、この古賀先生の辞典なくして詩の翻訳など到底不可能であったことを申し上げ、この場をお借りして心からの感謝の念を捧げたいと思います。ふたりで夢中になって辞書をひいてああだこうだと言いあっているうちに、小野原東のバス停から最終バスの出る時刻を過ぎてしまい、ひと晩泊って、朝飯も食わずに出勤するという間抜けなこともありましたが今となっては楽しい思い出です。

この詩集には 123 編の詩を収めています。先ほどお話した「日本原爆詩集」に載っている峠三吉さん、原民喜さんといった有名な作者の、原爆詩としては定番ともいうべき作品をほぼ訳しおえた段階で出版にむけての準備にも着手しました。翻訳開始から 8 カ月ほど経った 2011 年の年明けから著作権の許諾を得るために、作者がご存命の場合はご本人、すでに鬼籍に入られている方が多いのでたいていはご子息の方々にお手紙を差し上げました。連絡先の不明な方も多いのですが、２１名の方からお返事をいただきました。要は翻訳詩集をインドで出版したいので著作権の使用を無料で許可してほしいという虫の良いお願いだったのですが、ほとんどの方が快諾してくださり、励ましのお言葉まで頂戴し、気持ちも奮い立ちました。また私どもの知らない作品や本のあることも教えていただきました。たとえば東京のコールサック社という出版社から 2007 に出た「原爆詩 181 人集」という本がそれです。この本は峠三吉さん、栗原貞子さんといった昔の著名な方だけでなく、現代の詩人、それもほとんど世にその名を知られていないけれどこつこつと詩作に励んで同人誌などで発表しておられる方の作品を数多くとりあげ、また在日コリアンの方による作品なども収録していて、原爆詩集として非常に網羅

的な内容になっています。私どもの翻訳詩集には 86 名の作者による 123 編の詩を収めていますが、作品の選択が多少なりとも各方面に目配りできたものになっているとすれば、この本に負うところが大きかったと思います。さらにまたご自分の詩集をご恵贈くださる方もあり、そこからもいくつか選ばせていただきました。こうしてさらに翻訳を進めていき、2012 年 3 月にチョードリー先生がインドへ帰国されるときにはほぼすべての作品について一通りの訳を終えていました。

ただしその際先生は、原稿はできても出版に至る道は決して平坦ではない。日本のようにスムーズに運ぶと思うな。インドでは足を引っ張ろうとする人がいっぱいいる。だから気長に待て、ということを繰り返し強調されました。その言葉通り、待てど暮らせどなかなか吉報は入りません。ひとつ希望の持てそうな出版社も結局ダメになりました。こちらは、果報は寝て待てなどと呑気なメールを送りましたが、交渉にあたるチョードリー先生のご苦労は並大抵でなかったはずです。その間には、原作者のおひとりがご高齢のため亡くなったという知らせが届き、その方のお嬢さんからのお手紙に「(その後翻訳の) 進行具合はいかがですか、国も違えば思うようにいかないでしょうね」というようなことが書かれています。こちらも事情を説明したいのは山々ですが、それを言えばかえって言い訳としか受け取られかねず、たいへん申し訳なくつらい思いをいたしました。先生が帰国されて 1 年以上経った 2013 年 7 月頃、ご尽力がみのり、サーヒティヤ・アカデミーに原稿を手渡し、さらに年が明けて 2014 年を迎えてから、同アカデミーと出版の契約を交わすことができました。ところが、これで安心と思ったのが間違いで、その後 2 年以上も目立った動きはありませんでした。ひょっとすると立ち消えになるのかなと疑心暗鬼になりかけていたころ、今年の 4 月でしょうか、いきなりチョードリー先生から「いよいよ原稿を印刷に回すことになった」とメールが入ってびっくりしました。その後はもうすぐにゲラが送られてくる、略歴をかけ、表紙の写真はどれがいいか聞かれる、という具合に一気にことが進みました。日本的な感覚だと契約を交わして以降の 2 年間は何だったのかなということになるかもしれませんが、インドには日本と違う別の時間の流れがあるのだということが実感できて、後で思えばとてもいい経験ができました。物事がスムーズには進まず、必ず途中で行き詰ったり、停滞したりする、でも最後には何とかなる、それがインドだというような話を聞いたことがありますが、まさにその通りでした。もちろんそれとてチョードリー先生のご努力と奔走があってこそのことで、本当にここまでよくこぎつけて下さったと感謝しています。私の正直な思いとしては著作権の関係で大勢の方々に「インドでの出版を早期に目指しています」というお手紙を出した手前、チョードリー先生が帰国されてからの 4 年間というもの常にそのことが、魚の小骨がいつまでも喉にひっかかったような感じになっていただけに、ようやくこれで嘘つきにならずにすんだ、手紙を出した方々にどうにか顔向けできると胸をなでおろしたというところです。

さて、今年 8 月初めに本が出て、夏休みを利用して 6 日間だけですがデリーへ出向

き、先生と再会を果たし、100 冊の本をトランクと向こうで買ったリュックサックに詰め込み、それを背負って帰ってきました。チョードリー先生には重いから郵送させてほしいと頼んだのですが、大丈夫、これぐらい運べなくてどうする、と一蹴されました。どうも私は人から強く出られると、すぐにまあいいかと折れてしまうところがあるようです。成田空港で何かの密売人に間違えられて止められるんじゃないかと心配でしたが、あまりに哀れな姿だったのか係官からは見向きもされませんでした。ヒンディーの本だけをそのまま原作者やそのご家族にお送りしても、何のことかわからないでしょうから、序文と目次、原作者略歴を日本語訳した冊子を別に用意し、どれがその作者の作品かわかるようにして、訳詩集と合わせて、連絡先のたどれる限り、54 名の方にお送りしました。お手紙によるものだけでも 30 名を越える方からお返事をいただきました。たいへん失礼な言い草になりますが、予想以上に反響があったと感じました。ご自身が被爆体験をお持ちの原作者はもうほとんど亡くなっていて、お返事をいただいたのは多くは詩集で申しますと第 9 章と 10 章、1980 年以降に書かれた詩の作者の方々です。詩人として、一般には名前の知られていない方がほとんどです。原爆詩としては比較的新しいものになりますがそれでも作者の年齢は 70 代、60 代が多く、50 代なら一番若い部類です。ご自身に被爆の経験のない方がどういうわけで広島・長崎をテーマにした詩を書かれるのか、実は翻訳しながらいくらか疑問に思っていましたが、数々のお手紙を拝見してそのわけが少しずつわかってきました。ここでは戦後島根県浜田市にお生まれになったある女性の詩人から届いたお便りに書かれていたことをご紹介します。この方が幼い頃、しばしば周囲の大人たちが 8 月 6 日には中国山地をはさんで東の空に二度の朝焼けを見て不思議がったという話をしていたそうです。またこの女性詩人のお父様は原爆投下の一週間前に突然軍から除隊命令を受けて広島から帰ってこられましたが、それまで毎朝あの時間、軍の仕事で原爆ドームの傍を通っておられ、不思議なことがあるものだ、とよく話しておられたそうです。つまり、その除隊命令がなければお父様は原爆の被害にあわれた可能性が高いし、詩人ご本人もこの世に生を享けることがなかったかもしれない、というわけです。さらにまた詩人ご自身の経験として、昭和 40 年ごろ広島を訪れた折、顔にケロイドのある女性がスッと路地に身を隠すように消えていった姿を目撃して心痛んだ記憶があるということも書いておられます。これは一例ですが、いただいたお手紙を拝見しますと、どの方も原爆や戦争についての何らかの経験や記憶を持っておられることがわかります。その経験や記憶は直接のものではなく、たとえば周りの大人から聞いたという間接的なもので、いわばちょっとしたエピソードのようなものが多いのですが、それでもその人の中ではそれが忘れられないものとして心に残っていて、後年詩を書く、手記を書く、といった行動につながっているのだということが伝わってきました。当然のことではありますが何もなしに思いつきで詩が書かれているのではなく、やはりそれぞれの方に小さくとも意味のある経験があって、やむにやまれぬ思いというか、内からつきあげてくるものに促されて作品を書いておられるのだというこ

とが理解できてたいへんよかったし、勉強になったと思います。詩集の序文には世界平和を願ってこの詩集を編んだ、という趣旨の文章をチョードリー先生が非常に格調高く綴っておられます。もちろん、私もそれについて何ら異存はありませんし、自分のしていることができれば平和に向かう方向に役立ってほしい、戦争に役立ってほしいとはゆめ思いません。ですが、正直に申し上げてそういう大上段にふりかぶったことというのは少々このちっぽけな自分には立派すぎて気後れするところもあります。それよりも、何の縁かはわかりませんが、今回の翻訳を通して、お手紙を介して知り合った人たち、それぞれに核とか戦争とかについて何らかの思いなりお考えを持っておられる、そういう方々に歓迎していただいたこと、この翻訳がそうした方々の気持ちに沿うものであったこと、私としてはそこにささやかではあっても確かな喜びを感じることができました。やってよかったな、と今思っています。

今日は具体的な翻訳の話は致しませんでした。最後にその代わりといってはなんですが、事情により詩集には収まっていませんけれども、長崎の松尾あつゆきという方の俳句 30 句をご紹介します。この方はお手元の資料にありますように自由韻律の句を主導した荻原井泉水門下の俳人で、2011 年から 12 年にかけて集英社から刊行された「戦争と文学」というシリーズにも作品が掲載されています。この方のことも全く私は存じ上げなかったのですが、「長崎目覚めの会」という原爆被害を若い世代、特に修学旅行生などに伝える活動をしておられる長崎市の森口貢さんという方からこんなすばらしい作品があるということで教えていただきました。訳としてまだ完成はしておらず、いわば試作品の段階ですが、チョードリー先生も私もたいへん気に入っています。日本語の詩をヒンディー語に訳す場合、言葉をそのまま置き換えたのではヒンディーの詩として見た場合どうしても力強さに欠けるうらみがあるようです。淡々とした表現の中に余韻を響かせるということはむずかしいようで、「この単語では物足らない、ハルカーだ」ということをしきりに言われました。そこで勢いどうしても少し力のこもった表現に変えようとするのですが、それが行き過ぎると原詩の味わいとずいぶん違うものになってしまう。そこのせめぎあいが翻訳の作業で一番問題になったことだと思います。で、今日俳句をご紹介しましたのは、俳句はもともと短くて淡々としたものであるだけに、ヒンディーに翻訳した場合にもあまり力瘤を入れなくてすむ、けっこう味わい深く余韻の響くものになっているのではないかと思ったからです。かの詩聖タゴールも日本の俳句をいくつかベンガル語に訳していますけれども、俳句は案外インドの言葉と相性が良いのかもしれません。最後はいささか手前味噌になりましたけれども、ひとつご覧になって楽しんでいただき、御叱正を賜ればありがたいと思っています。

たいへんつたない話でしたが、どうも、ご清聴ありがとうございました。

# मेरे प्रिय पाठको

## मिकि यूइचिरो

नमस्कार।

मैं ओसाका के ताइशो हाई स्कूल में जापानी भाषा का शिक्षक और आप लोगों का बहुत पुराना सीनियर मिकि यूइचिरो हूँ। आज आप लोगों के सामने अपनी बात कहने का मौका पाकर मुझे बहुत खुशी हो रही है। मैं 1977(शोवा 52) में ओसाका विदेशी भाषा विश्वविद्यालय के हिंदी विभाग में दाखिल हुआ था। शोवा युग अब बहुत दूर जा चुका है। तब से अब तक लगभग चालीस साल हो गए, पर लगता है कि ये चालीस साल पलक झपकते ही बीत गए। उस समय यहीं उपस्थित प्रतिष्ठित आचार्य मिज़ोकामि तोमिओ सेंसेइ छत्तीस सैंतीस वर्ष की उम्र के जोशीले जवान रीडर थे। लगता था कि मानो उन की सारी देह से बुद्धि और स्फूर्ति टपक रही हो। वे बहुत हँसमुख व्यक्ति थे और कक्षा के बाहर खुले दिल से विद्यार्थियों के साथ बातें करते थे पर कक्षा में सख्ती से अभ्यास करानेवाले बहुत कठोर अध्यापक थे। प्रोफेसर ताकाहशि मुझ से दो साल सीनियर थे। उस समय आदरणीय लक्ष्मीधर जी मालवीय हमारे अभ्यागत आचार्य थे और वे हम छात्र-छात्राओं के नामों के साथ समान रूप से " कुन् " लगाकर हमें संबोधित करते थे पर एकमात्र ताकाहाशि जी के लिए " सान् " लगाते थे। कभी उन की निबंध लेखन की कक्षा में ऐसा कठिन जापानी शब्द मिल जाता जिस का हिंदी पर्यायवाची शब्द किसी भी छात्र-छात्रा को सूझ न पाता तो वे कहा करते थे " ताकाहाशि सान् से पूछें, वे सब कुछ जानते हैं।" इस तरह ताकाहाशि जी हमारे छात्र-जीवन में एक दंतकथा के पात्र रहे हैं। आदरणीय अध्यापकों, वरिष्ठ विद्यार्थियों और अच्छे मित्रों से घिरे हुए मैंने हिंदी विभाग के राजमार्ग पर चलते हुए छह सालों में बी. ए. का कोर्स पूरा किया था। उस के बाद मैं ओसाका जनपद की राजकीय हाईस्कूल के शिक्षक पद पर नियुक्त हुआ, फिर भी हिंदी पढ़ने की सनक न उतरी और शौक से हिंदी उपन्यासों के कच्चे अनुवाद करता रहा। सचमुच यह

‘सूझे नहीं और गुलेल का शौक़’ रहा और जब ध्यान आया तब बुढ़ापे में अपना पैर रखा हुआ पाया।

आज मैं प्रोफेसर हरजेन्द्र चौधरी के सहयोग से इस वर्ष अगस्त में भारत में प्रकाशित हुए अनूदित कविता संग्रह "परमाणु बम की छाया में" के सिलसिले में अनुवाद और प्रकाशन-कार्य के ब्यौरे तथा उसी प्रक्रिया में मुझे जो प्रतीत हुआ उसे व्यक्त करूँगा और बाद में नागासाकी के परमाणु बम त्रासदी पर आधारित उन हाइकु कविताओं का परिचय दूँगा जिन से आप लोगों को अनुवाद-कार्य की व्यावहारिकता का आभास मिलेगा। ये तीस हाइकु हमारे कविता संग्रह में संकलित नहीं हैं।

बात 1995, अब से इक्कीस साल पहले की है। आप लोग अभी छोटे-छोटे बच्चे रहे होंगे। प्रोफेसर चौधरी उस समय ओसाका विदेशी भाषा विश्वविद्यालय के हिंदी विभाग में अभ्यागत आचार्य थे और एक दिन उन्होंने कहा “मिकि जी आप का जन्मस्थान हिरोशिमा जनपद में है। मैं छह अगस्त को हिरोशिमा का भ्रमण करना चाहता हूँ। कृपया मुझे हिरोशिमा शहर की सैर करवाइए।" बहुत से भारतीय बुद्धिजीवियों को नाभिकीय आयुध की समस्याओं में बहुत गहरी रुचि है और उन लोगों के लिए हिरोशिमा-नागासाकी एक प्रकार के तीर्थधाम हैं जिन के दर्शन के बिना उनकी जापान-यात्रा अधूरी रह जाती है। अतः पहले पाँच अगस्त को मैं चौधरी जी को अपने जन्मस्थान फुकुयामा शहर (हिरोशिमा जनपद के पूर्वी हिस्से में है) के उत्तरी छोर पर स्थित एक गाँव ले आया। चौधरी जी स्वाभाविक कौतूहलवश गांव में इधर उधर घूमते फिरते रहे। उस ज़माने में देहात में विदेशी लोग बहुत कम दिखते थे और किसी भारतीय का हमारे गांव में आना अभूतपूर्व घटना थी। इस लिए जगह जगह गांववालों को संदेह हुआ कि आख़िर यह अपरिचित आदमी कौन है। उस दिन चौधरी जी हमारे घर में ठहरे और दूसरे दिन सुबह मेरे साथ हिरोशिमा के लिए चल पड़े। उन्हें जल्द से जल्द हिरोशिमा जाने की इच्छा हो रही थी। पर छह अगस्त की सुबह मैं देर तक सोया या न जाने कुछ और गड़बड़ हुई हो, जब हम लोग हिरोशिमा के शान्ति स्मारक उद्यान पहुँचे तब तक शान्ति स्मारक समारोह समाप्त हो चुका था। चौधरी जी ने उस स्थिति का वर्णन पुस्तक की भूमिका में इस तरह किया है "लंबे-चौड़े उद्यान में खाली कुर्सियों की उदास कतारें थीं।" मुझे लगता है कि यहाँ

"उदास" शब्द में उन की खीज, क्षोभ, उलाहना, शिकायत आदि मनोभाव निहित है और जब भी मैं ये पंक्तियाँ पढ़ता हूँ मन में कुछ खेद हो जाता है। हम लोग साथ-साथ शान्ति स्मारक संग्रहालय गए। चौधरी जी एक एक प्रदर्शित चीजों के सामने रुकते हुए बड़े शौक से देख रहे थे। मेरे मुँह तक यह बात आने को होती थी कि “देर हो रही है, अब निकलना ठीक नहीं है क्या?” मुझे याद है कि शान्ति स्मारक संग्रहालय में कई घंटे प्रदर्शनी को देखने के बाद जब हम लोग जहाज में बैठकर समंदर पार करके मियाजिमा-द्वीप पहुँचे तब देर तक ठहरनेवाला ग्रीष्म ऋतु का सूरज भी बहुत कुछ ढल गया था। मैं अच्छी तरह समझ गया था कि अगस्त 1995 की हिरोशिमा यात्रा से चौधरी जी बहुत ही प्रभावित हुए थे पर उस समय हिरोशिमा-नागासाकी वाली कविताओं की बात उन के मुँह से न निकली थी। वे अगले साल मार्च 1996 में भारत वापस चले गए। अब से छह साल पहले, 2010 में चौधरी जी को जापान आगमन का दूसरा अवसर मिला। उस समय वे गाइदाइ (ओसका विदेशी भाषा विश्वविद्यालय) के नहीं, आप लोगों के ओसाका विश्वविद्यालय के प्राध्यापक की हैसियत से आए। जब पहली बार चौधरी जी आए थे तब उन के साथ उनकी श्रीमती जी और दो नन्हें बच्चे भी थे और वे अपने परिवार की देखभाल का दायित्व निभाते हुए बहुत ही व्यस्त थे। अब यह भेद खुल जाए तो भी कोई दिक्कत न होगी, इस लिए मैं बताता हूँ कि चौधरी जी ने एक दिन चोरी से रामेन (नूडल्ज़) खाया। रामेन उनको अच्छा लगा पर खाने के बाद गंभीर मुद्रा में वे बोले "यह बात पत्नी से हरगिज़ मत कहो।" सपरिवार रहने से उन के मन में तरह तरह की चिंता लगी रहती होगी। पर जब दूसरी बार चौधरी जी आए तब अकेले आए और उनके पास बहुत समय था। शायद वक्त की प्रचुरता से जी थोड़ा बहुत ऊब भी गया होगा। खैर, उन के आने के तुरंत बाद मैं उन को प्रणाम करने उन के ओनोहारा वाले क्वार्टर गया तो उसी समय उन्होंने कहा "मैं हिरोशिमा-नागासाकी की त्रासदी पर आधारित जापानी कविताओं को हिंदी में अनूदित करना चाहता हूँ ।इस तरह का अनूदित कविता संग्रह अँगरेजी में प्रकाशित हो चुका है पर हिंदी में नहीं। यदि हिंदी में भी प्रकाशित हो जाए तो बहुत सार्थक होगा। मेरे मित्रगण भी मुझे अनुवाद करने के लिए प्रोत्साहन दे रहे हैं। आप ज़रूर मेरा सहयोग करें।" मैं विपत्ति में पड़ गया। जापानी से हिंदी में अनुवाद करना हिंदी-जापानी अनुवाद की तुलना

में कई गुना मुश्किल है। यह काम मेरे योग्य नहीं था और सच पूछिए तो इस तरह की बड़े झंझट का काम करने में क्या फायदा है? मैं दुविधा में पड़ा पर सिर्फ़ तीन मिनट में मुझे यह लगने लगा था कि उन्होंने मुझे इसके लिए राज़ी कर ही लिया था। मैंने व्यस्तता का बहाना करके टाल क्यों नहीं दिया और क्यों हाँ कर दी? बाद में सोचने पर मैं इस के कई कारण गिना सकता हूँ। पहला, हिरोशिमा-नागासाकी वाली कविताओं को हिंदी में अनूदित करके उन्हें भारतीय पाठकों के लिए प्रस्तुत करना भोले मन से सोचने पर निःसंदेह अच्छी बात लगी होगी। एक विदेशी आदमी का परमाणु बम के मसले में रुचि लेना हमारे लिए बड़ी खुशी की बात थी। कविताओं को हिंदी में अनूदित करने की उन की आकांक्षा बहुत सराहनीय थी। दूसरा, अपने बीते दिनों की याद करूँ तो सिर्फ़ छात्र-जीवन में ही नहीं उस के बाद भी हिंदी उपन्यास का जापानी अनुवाद करते करते मुझे अनेक भारतीयों की सहायता मिलती रही। एकतरफा सहायता मिलती रही। इस लिए मुझे लग रहा था कि कुछ तो उन के एहसान का बदला चुकाना चाहिए। और जैसे मैं पहले कह चुका हूँ मेरा जन्मस्थान हिरोशिमा जनपद में है। लगभग पचास साल पहले जब मैं प्राइमरी स्कूल में पढ़ता था तब गर्मी की छुट्टियों में भी छह अगस्त को स्कूल जाना पड़ता था। हर साल छह अगस्त को स्कूल में सुबह की सभा होती थी। हेडमास्टर साहब मंच पर चढ़कर भाषण करते थे कि लगभग बीस इक्कीस साल पहले इसी समय अर्थात आठ बजकर पन्द्रह मिनट हिरोशिमा पर परमाणु बम गिराया गया और बहुत से लोग बम के शिकार हुए थे। हम लोग इस तरह की बातें हर साल उसी दिन सुनते रहे थे। इस मसले में मेरी विशेष रुचि तो नहीं रही। मैं एक अनमना-सा असावधान आदमी हूँ। हिरोशिमा जनपद में जन्मे हुए होने पर भी मैं जब तक चौधरी जी के साथ हिरोशिमा गया तब तक शान्ति स्मारक संग्रहालय के दर्शन नहीं कर पाया था फिर भी मेरा सीधा-सादा यह खयाल अवश्य रहा कि इस दुनिया से नाभिकीय आयुध का सफाया हो जाए तो कितना अच्छा होगा। चौधरी जी ने इस तरह के मेरे सोच-विचार को समझकर मुझे मनाने का प्रयत्न किया। इस लिए उन के प्रस्ताव को टालना कठिन था। फिर मैंने यह भी सोचा कि अगर मैं टाल-मटोल कर दूँ तो उन को कैसा लगेगा। ठीक है कि वे मुझे ढीला और सुस्त आदमी समझेंगे। पर यदि वे सोचें कि द्वितीय महायुद्ध के बाद पैदा हुए नई

पीढ़ी के जापानी नागरिक नाभिकीय आयुध या परमाणु बम की समस्या के प्रति उदासीन हैं तो ठीक नहीं होगा। मुझे इस की आशंका थी। हम अनुमान लगा सकते हैं कि हिरोशिमा और नागासाकी में अब भी ऐसे बहुत से गुमनाम और साधारण लोग रहते हैं जो प्रकट रूप में अपना मन व्यक्त नहीं करते फिर भी परमाणु बम-त्रासदी के सिलसिले में अपने हृदय में गहरी सोच रखकर जीवन व्यतीत कर रहे हैं। यदि मैं चौधरी जी का प्रस्ताव टाल दूँ तो कहीं ऐसा तो नहीं होगा कि उन लोगों की सोच की उपेक्षा हो जाएगी? खैर, यह सोचना शायद अतिशयोक्ति जैसा रहा होगा। पर मेरी वजह से हम जापानियों का नाम बुरी तरह खराब हो गया होगा कि सामान्यतया मेहनती जापानियों में भी ऐसा ढीला आदमी है जो आवश्यक अवसर पर भी सुबह देर तक सोता है। इस लिए मैंने अपनी वजह से अपने देश के मुँह पर और ज्यादा कलंक न लगाना चाहा और उन के प्रस्ताव को स्वीकार करने के सिवा और कोई चारा न था। हम लोग अक्सर अपने अपने तरीके से मन में किसी देश या किसी देश की जनता की तस्वीर बनाते हैं। वह तस्वीर किस तरह बनाई जाती है? शायद ऐसे व्यक्ति के प्रभाव से बनाई जाती है जिस के संपर्क में आने का मौका हमें संयोगवश मिला हो। मतलब यह है कि विदेशी लोग भी हम में से प्रत्येक आदमी के माध्यम से जापान देश की असलियत को जानने की कोशिश करते हैं और अंदर ही अंदर जापानी लोगों की तस्वीर बनाते हैं। विदेशी भाषा संकाय के विद्यार्थी होने के नाते आप लोगों को इन बातों की बहुत अच्छी जानकारी होगी। इस लिए सूरज को दीपक दिखाने की जरूरत नहीं है। हो सकता है कि आप लोगों को मेरा मन और कथन अतिशय सीधा-सादा और भोला लगे। फिर भी इन कारणों से मैंने चौधरी जी के प्रस्ताव को स्वीकार करके उन के साथ हिरोशिमा-नागासाकी वाली कविताओं को हिंदी में अनूदित करने का संकल्प किया।

अब मैं अनुवाद-कार्य की प्रक्रिया की व्याख्या करूँगा। हिरोशिमा-नागासाकी त्रासदी पर आधारित कविताओं के बारे में चौधरी जी को ही नहीं मुझे भी कोई जानकारी नहीं थी। इस लिए सबसे पहले हमें सामग्री-संकलन करना पड़ा। मैं ओसाका शहर के निशि (पश्चिम) वार्ड के निशिनागाहोरी में स्थित ओसाका नगरपालिका के केंद्रीय पुस्तकालय गया। मैं विद्यार्थी-जीवन के समय से ही अक्सर किताबें लेने वहाँ जाया करता था। बहुत

सी परमाणु बम संबंधी पुस्तकें चालीस पचास वर्ष पुरानी हैं। 1970 के आसपास श्री ओओहारा मियाओ जी के द्वारा संकलित "जापान परमाणु बम कविता संग्रह ", ओओहारा जी के द्वारा संपादित "अँगरेजी में अनूदित परमाणु बम कविता संग्रह " और अपेक्षाकृत नई दो सुंदर सचित्र पुस्तकें "छोटी-सी प्रार्थना" तथा "द्वितीय मूवमेंट" जिन का पाठ सुप्रसिद्ध अभिनेत्री योशिनागा सायुरि जी के द्वारा किया गया और इसके लिए उन्हें बड़ी शोहरत हासिल हुई। पुस्तकें जब भी मिलीं उन्हें इशू कराकर हम लोग धीरे धीरे अनुवाद करते गए। यह सोचने से ही कि परी जैसी योशिनागा जी ने जिन पंक्तियों का पाठ किया था, उन्हें इस वक्त मैं हिंदी में अनूदित कर रहा हूँ, मुझे बड़ा संतोष हुआ। हमारे हाईस्कूल के कुछ नटखट छात्र कभी कभी क्लास छोड़कर लोकप्रिय गायकों के कंसर्ट में उपस्थित हो जाते हैं। उन का मनोभाव मैं कुछ कुछ समझ पाया। प्रायः दो हफ्तों में एक बार मैं ओनोहारा वाले चौधरी जी के क्वार्टर जाता था और मई 2010 से फरवरी 2012 तक क़रीब दो साल लगातार हम लोग अनुवाद-कार्य को आगे बढ़ाते रहे। शब्दकोश की सहायता से मैं जिन पंक्तियों का शब्दशः अनुवाद करता, उन्हें चौधरी जी संशोधित करते या यों कहना ज्यादा ठीक होगा कि नश्तर से चीड़-फाड़ करते और उन्हें बहुत ही सुंदर हिंदी कविताओं का रूप देते। मेरे मसौदे की पूरी तरह से मरम्मत की जाती और चीड़-फाड़ के बाद उस के मूलरूपों का कहीं नामोनिशान भी न रहता। इसी दौरान हम लोग आदरणीय कोगा कात्सुरो सेंसेइ, जिन्होंने इस संगोष्ठी के लिए स्नेहिल संदेश भेजने की कृपा की है, के द्वारा संपादित "जापानी-हिंदी शब्दकोश" पर पूरी तरह निर्भर रहे। जब हम विद्यार्थी थे तब हिंदी में निबंध लिखने के लिए हमें पहले जापानी-अंग्रेजी शब्दकोश से अंग्रेज़ी शब्द का पता करके उस के बाद अंग्रेजी-हिंदी शब्दकोश से हिंदी का शब्द प्राप्त करना पड़ता था। बड़ी झंझट उठानी पड़ती थी। आज आप विद्यार्थी लोग इस गोष्ठी का संचालन करने के लिए अच्छी हिंदी में बोलते हुए संचालक का दायित्व निभा रहे हैं और अपना लेख प्रस्तुत कर रहे हैं। इस का पांडुलेख आप लोगों ने किस तरह तैयार किया होगा? जापानी-अंग्रेज़ी और अंग्रेज़ी-हिंदी, इन दो शब्दकोशों से पता लगाने के चक्कर में किसी तरह हिंदी शब्द हमें मिल जाए तो भी उस का अर्थ मूल जापानी शब्द के अर्थ से बहुत कुछ हट गया होता था और देर रात तक खूब मेहनत करके तैयार किया गया निबंध दूसरे दिन कक्षा में प्रस्तुत

करने पर हमें भारतीय अध्यापक की कड़ी झिड़की खानी पड़ती थी, “तुम ने नशे में लिखा है क्या?” क्लास में अनेक बार हम लोग उन के शिकार हुए थे। बिलकुल कार्टून की-सी दशा होती थी। पर आज हम लोगों को इस तरह की मेहनत करने की जरूरत नहीं है और शब्दकोश के प्रधान शब्दों में प्रायः सब जापानी शब्द दर्ज हैं और उन के नितांत सही हिंदी पर्याय मिलते हैं। सचमुच हमारे लिए यह शब्दकोश ‘जादू की छड़ी’ जैसा है। पता नहीं कि इस रत्न का सदुपयोग मैं किस हद तक कर पाया। पर इस शब्दकोश के बिना हमारा अनुवाद-कार्य बिलकुल असंभव हुआ होता। यहाँ मैं आदरणीय कोगा जी के प्रति अपनी हार्दिक कृतज्ञता प्रकट करना चाहता हूँ। एक दिन चौधरी जी और मैं मिलकर शब्दकोश की सहायता से अनुवाद करते रहे और तब पता चला कि ओनोहारा हिगाशि के बस अड्डे से आखिरी बस निकलने का वक्त कब का बीत चुका था। उस रात मैं वहीं ठहरकर दूसरे सुबह नाश्ता किए बिना ही काम पर गया था। आप लोगों को यह मेरी मूर्खता लग रही होगी। पर आज भी उस समय की मधुर स्मृति मैं भूल नहीं पाता हूँ। इस अनूदित कविता संग्रह में 123 कविताएँ संकलित हैं। उपरोक्त "जापान परमाणु बम कविता संग्रह" में तोगे सांकिचि, हारा तामिकि आदि सुप्रसिद्ध कवियों की जो विख्यात कविताएँ संकलित थीं उन का अनुवाद प्रायः पूरा होने के बाद हम लोगों ने पुस्तक के प्रकाशन के लिए आवश्यक तैयारी शुरू की। अनुवाद-कार्य का श्रीगणेश करने के लगभग आठ महीने बाद जनवरी 2011 के शुरू में से हम लोग स्वायत्ताधिकार की अनुमति लेने के लिए मूल कवियों को पत्र देने लगे। बहुत से मूल कवियों का देहांत हो चुका था। अतः हम लोग बहुधा उन की संतानों को पत्र देते रहे। बहुत कुछ स्वायत्ताधिकारियों से संपर्क करने का कोई स्रोत या रास्ता नहीं मिला। फिर भी इक्कीस लोगों से पत्रोत्तर मिले। हमारे पत्रों का मज़मून यह था कि हम लोग अनूदित कविता संग्रह भारत में प्रकाशित करना चाहते हैं इस लिए कृपया स्वायत्ताधिकार की अनुमति मुफ्त में दें। इन पत्रों का आशय खुदगर्ज़ था। पर प्रायः सब लोगों ने हमारी प्रार्थना को प्रसन्नतापूर्वक स्वीकार किया और अनुवाद-कार्य पूरा करने के लिए हमें प्रोत्साहित किया। हमारा उत्साह बढ़ गया। फिर कई लोगों ने ऐसी अनेक कविताओं और पुस्तकों का परिचय दिया जो हम लोगों के लिए बिलकुल अपरिचित थीं। मसलन मैं 2007 में तोक्यो के एक प्रकाशक "कोल्सैक"

द्वारा प्रकाशित "181 कवि-कवयित्रियों का परमाणु बम-कविता संग्रह" के बारे में यहाँ चर्चा करता हूँ। इस में तोगे सांकिचि, कुरिहारा सादाको आदि पुराने समय के प्रसिद्ध कवियों की ही नहीं बल्कि बहुत से नए कवियों की रचनाएँ भी संकलित हैं। इन आधुनिक कवियों के नाम जग-जाहिर तो नहीं हैं, फिर भी वे लोग मनोयोग से रचना-कार्य में जुटे हुए हैं और अपनी अपनी साहित्यिक मंडली की पत्रिका में कविताएँ देते रहते हैं। फिर इस "कोल्सैक" वाले कविता संग्रह में जापान में रहनेवाले कई कोरियाई कवियों की रचनाएँ भी संकलित हैं। इस तरह इस कविता संग्रह में हिरोशिमा-नागासाकी की त्रासदी पर आधारित अनेक प्रकार की कविताएँ संग्रहीत हैं। यदि हमारे अनूदित कविता संग्रह में रचनाओं के चयन का मानदंड एकतरफा न होकर काफी हद तक संतुलित लगता हो तो हमें "कोल्सैक" वाली इस पुस्तक का एहसान मानना चाहिए। इस के अलावा कई कवि और कवयित्रियों ने हमें अपने कविता संग्रह भेंट करने की कृपा की और हम लोगों ने उन में से भी कुछ कविताएँ चुन लीं। हम लोग अनुवाद-कार्य निरंतर आगे बढ़ाते रहे और जब मार्च 2012 में चौधरी जी भारत लौटे तब प्रायः सभी कविताओं का अनुवाद लगभग पूरा हो चुका था।

पर उस समय चौधरी जी ने बार बार मुझ से कहा, "पांडुलिपि तैयार हुई, फिर भी प्रकाशन का मार्ग टेढ़ा मेढ़ा है। भारत जापान नहीं है। कोई भी काम बिना रुकावट के संभव नहीं होता। भारत में बाधा डालनेवाले ज्यादा हैं। आप को धीरज से इंतज़ार करना चाहिए।" उन की बात ठीक ही निकली। बहुत इंतज़ार करने पर भी खुश खबरी नहीं मिली। एक प्रकाशन से हमारी पुस्तक प्रकाशित होने की उम्मीद थी। लेकिन वह बात भी बीच में अटक गई। मैंने बेफिक्र होकर चौधरी जी को ई-मेल भेजा “जापान में एक कहावत है, “पुण्यफल मिलने की प्रतीक्षा सोते सोते करनी चाहिए।" पर चौधरी जी को प्रकाशक से प्रकाशन की शर्तों पर बातें करनी पड़ी थीं। उन को कितना बड़ा मानसिक एवं व्यावहारिक कष्ट उठाना पड़ा होगा। इस बीच एक दुःख भरी ख़बर मिली कि वृद्धावस्था के कारण एक मूल रचनाकार का देहांत हो गया। उन की सुपुत्री ने चिट्ठी में लिखा था, "आप लोगों का अनुवाद-कार्य आजकल कैसे चल रहा है? दूसरे देश में प्रकाशन-कार्य आप का मनचाहा होने की संभावना नहीं है न?" जी तो बहुत चाहता था कि सारी स्थिति

बता दूँ मगर ऐसा नहीं किया क्योंकि ऐसा बताता तो ज़रूर उन को लगता कि मैं बहाना बनाकर टाल मटोल कर रहा हूँ। उस समय मुझे बड़ा दुःख हुआ था। चौधरी जी को भारत लौटे एक साल से ज्यादा हो गया था, जुलाई 2013 के आसपास आख़िर उन के प्रयत्न का सुफल मिला। हम लोगों ने साहित्य अकादेमी को पांडुलिपि प्रस्तुत की और अगले साल 2014 की शुरुआत में पुस्तक के प्रकाशन पर साहित्य अकादेमी के साथ एक संविदा हो गई। मैं निश्चिंत हुआ। पर निश्चिंत होना शायद ठीक नहीं था। इस के बाद क़रीब सवा दो साल तक प्रकाशन-कार्य में कोई भी विशिष्ट प्रगति नहीं हुई। मेरे मन में संदेह होने लगा कि कहीं साहित्य अकादेमी वाली बात भी स्थगित न हो जाए, तब एकाएक पिछले अप्रैल में चौधरी जी का एक मेल मिला कि अब हमारी पांडुलिपि छापेखाने में पहुँच जाएगी। मुझे आश्चर्य हुआ। इस के बाद मुझे झट से प्रूफ मिला और लगातार आदेश मिलते रहे कि अपना और जापानी कवि कवयित्रियों का संक्षिप्त परिचय दे दो या आवरण का फोटो कौन सा ज्यादा अच्छा होगा, अपनी राय दें। इस तरह एकदम बात आगे बढ़ गई। जापानी मानदंड के अनुसार यह बात गले के नीचे नहीं उतरती कि संविदा हो जाने के बाद दो साल तक हमें खाली प्रतीक्षा क्यों करनी पड़ी। मुझे यह अनुभूति हुई कि भारत और जापान के समय के बहाव में बहुत बड़ा अन्तर होता है। अब मैं दावे के साथ कह सकता हूँ कि यह बहुत अच्छा अनुभव था। किसी ने ऐसा कहा था कि हर काम ठीक नहीं चलता, बीच बीच में अटक जाता है, रुक जाता है, पर अंत में ज़रूर मंज़िल तक पहुँच जाता है, यही भारत है। यह बात सच ही निकली। निस्संदेह चौधरी जी के निरंतर और अथक परिश्रम से ही हमारा काम सिद्ध हुआ। मैं उन का बहुत आभारी हूँ। मैंने पहले अनेक स्वायत्ताधिकारियों और उन के उत्तराधिकारियों को पत्र दिए थे और उन में ऐसा लिखा था कि हम लोग अपना अनूदित कविता संग्रह फौरन भारत में प्रकाशित करना चाहते हैं। अतः चौधरी जी के वापस जाने के बाद चार सालों तक यह बात हमेशा मछली की जिद्दी हड्डी की तरह गले में अटकी हुई महसूस हो रही थी। सच पूछिए तो मुझे राहत मिली कि अब मैं झूठा नहीं कहलाऊंगा और आख़िर समाज में मुँह दिखलाने लायक हो जाऊँगा।

अच्छा, अगस्त के आरंभ में हमारी पुस्तक प्रकाशित हुई। मैं गर्मी की छुट्टियों में छह दिनों के लिए दिल्ली गया और चौधरी जी से मिलने के बाद पुस्तक की एक सौ प्रतियाँ

सूटकेस और वहाँ खरीदे गए झोले में भरकर पीठ पर लादे वापस आया। मैंने चौधरी जी से कहा कि इतने भारी सामान को मैं कैसे ले जाऊँ, डाक से भिजवाने का प्रबंध करें। पर उन्होंने मेरा प्रस्ताव ठुकरा दिया कि कोई बात नहीं, इतनी सी किताबें आप आसानी से ले जा सकते हैं, डाक से भेजने से गड़बड़ हो जाएगी तो अच्छा नहीं होगा। कोई आदमी किसी बात पर ज़ोर देकर मुझे समझाता है तो मैं प्रायः उसकी बात तुरंत मान लेता हूँ। यह मेरे स्वभाव की एक कमजोरी है। मुझे यह चिंता हो रही थी कि नरिता विमान पत्तन पर मुझ पर तस्करी का संदेह किया जाए तो क्या होगा? शायद मेरी शक्लोसूरत इतनी दयनीय थी कि नरिता के आफिसर ने मुझे आँख उठाकर भी न देखा।

मूल रचनाकारों या उन की संतानों को अनूदित कविता संग्रह भेजने पर भी वे लोग नहीं पढ़ सकते। इस लिए मैंने एक जापानी पुस्तिका तैयार की जिस में अनूदित कविता संग्रह की भूमिका, विषय-सूची और मूल रचनाकारों के संक्षिप्त परिचय के जापानी अनुवाद दिए गए हैं। इस से उन लोगों को भी पता चलेगा कि हिंदी की पुस्तक में कौन-कौन सी उनकी रचना है। मैंने जहाँ तक संपर्क हो सका वहाँ तक, कुल मिलाकर चौवन लोगों को अनूदित कविता संग्रह और जापानी पुस्तिका भेज दी। तीस से अधिक लोगों के पत्रोत्तर मिले। यह कहना गुस्ताखी होगी पर मुझे लगा कि अप्रत्याशित रूप से उन की ओर से मैत्रीपूर्ण प्रतिक्रिया मिली। जो रचनाकार ख़ुद परमाणु बम के शिकार हुए प्रायः उन का देहांत हो चुका है और जिन लोगों ने पत्रोत्तर देने की कृपा की उन की कविताएँ बहुधा 1980 के बाद लिखी गई हैं और कविता संग्रह के खंड 9, 10 में संकलित हैं। ये लोग प्रायः कवि कवयित्रियों के तौर पर सुप्रसिद्ध नहीं हैं। उन की परमाणु बम वाली रचनाएँ अपेक्षाकृत नई हैं। फिर भी उन की उम्र ज्यादातर साठ सत्तर वर्ष की है और पचास पचपन साल का रचनाकार है तो वह सब से नई पीढ़ी का है। सच पूछिए तो अनुवाद करते करते मेरे मन में एक सवाल उठ खड़ा हुआ था कि जो ख़ुद परमाणु बम के शिकार नहीं हुए उन का क्यों हिरोशिमा-नागासाकी के विषय पर कविता लिखने का इरादा हुआ? पर इन लोगों के पत्र पढ़ने से मैं धीरे-धीरे समझ गया कि क्यों उन को लिखने का मन हुआ। यहाँ मैं मिसाल के तौर पर महायुद्ध के बाद शिमाने जनपद के हामादा शहर में जन्मी एक कवयित्री के पत्र का परिचय देता हूँ। जब वे छोटी थीं तब वे

अक्सर इर्द-गिर्द के बड़े लोगों को यह बातें करते सुनती थीं कि छह अगस्त की सुबह को चूगोकु पर्वतमाला के पार पूरब के आकाश में दो बार लालिमा देखकर उन्हें बहुत ही आश्चर्य हुआ। इस कवयित्री के पिता जी युद्ध के दौरान हिरोशिमा में सेना के काम में नियुक्त थे और परमाणु बम गिराए जाने के एक सप्ताह पहले उन को अचानक सैन्य सेवा से मुक्त होने की आज्ञा मिली और वे हामादा वापस आए। जब तक वे हिरोशिमा में रहते थे तब तक वे हर सुबह लगभग सवा आठ बजे सैन्य काम से परमाणु गुंबद के पास गुजरते रहते थे और बाद में अक्सर कहा करते थे कि सचमुच इस दुनिया में कभी न कभी विस्मयकारी घटना हो जाती है। अर्थात वह आज्ञा न मिली होती तो बहुत संभव है कि परमाणु बम के शिकार होकर उन की मृत्यु हुई होती और ख़ुद उन कवयित्री का जन्म इस दुनिया में न हुआ होता। फिर उन्हीं कवयित्री का यह दूसरा अनुभव है कि जब पचास साल पहले वे हिरोशिमा गईं तब वे जिस स्त्री के चेहरे पर परमाणु बम से जले दाग थे उसे झटपट गली में घुसकर छिप जाते देखकर बहुत दुखी हुई थीं। इस के अलावा भी मुझे अनेक पत्र मिले। उन्हें पढ़ने से पता चलता है कि हरेक रचनाकार का परमाणु बम या युद्ध के सिलसिले में अपना अपना अनुभव या स्मृति है। ऐसा नहीं कि वह अनुभव उस ने प्रत्यक्ष रूप से किया हो। बहुधा वह अनुभव या स्मृति अप्रत्यक्ष थी जैसे किसी से सुना हो या उनके लिए वह छोटे-से उपाख्यान की तरह था। फिर भी वह घटना एक अविस्मरणीय स्मृति बनकर उन के मन में रह जाती, बाद में वह अंकुरित होकर बड़ा पेड़ बन जाता और कविता-लेखन या संस्मरण-लेखन का सुफल देता। यह बताने की जरूरत न होगी कि कोई भी कवि बिना सोचे समझे कविता नहीं लिखता है। चाहे कितना छोटा हो, तो भी उस का अपना अपना निजी सार्थक अनुभव है और हृदय में उमड़ते जोश से उत्साहित होकर वह रचनाधर्मिता करता है। यह जानकर मुझे बहुत अच्छा और लाभदायक लगा। पुस्तक की भूमिका चौधरी जी ने बहुत शानदार शैली में लिखी है। उस का सारांश यह है कि हम ने विश्वशांति की प्रार्थना में इस अनूदित कविता संग्रह का संपादन किया है। अवश्य मुझे विश्वशांति की प्रार्थना पर कोई आपत्ति नहीं है और मेरी यह हार्दिक इच्छा है कि अपना कार्य शान्ति के काम में आए, युद्ध के काम में हरगिज न आए। फिर भी सच पूछिए तो इस तरह का उदात्त आदर्श मुझ जैसे छोटे आदमी को अत्यधिक भव्य लगता है

और पढ़कर थोड़ा बहुत संकोच होता है। अस्तु न जाने किस्मत का क्या खेल, इस अनुवाद-कार्य में पत्रों के माध्यम से जिन लोगों से जान-पहचान हुई उन का नाभिकीय आयुध या युद्ध के मसले पर अपना अपना गहरा सोच एवं विचार है, उन लोगों ने हमारे अनूदित कविता संग्रह का स्वागत किया है, यह पुस्तक उन लोगों के मनोभाव के अनुकूल लगी, इस तथ्य में मुझे चाहे कितनी छोटी हो, दृढ़ प्रसन्नता महसूस हुई। अब ऐसा लग रहा है कि हम लोगों ने यह अच्छा काम किया है।

आज मैं अनुवाद के व्यावहारिक ज्ञान पर बातें नहीं कर पाया। अंत में उस की क्षतिपूर्ति के लिए मैं नागासाकी में रहे मात्सुओ अत्सुयुकि जी के 'तीस हाइकु' का परिचय देना चाहता हूँ। आपको अपने पास वाले पेपर देखने से पता चलेगा कि मत्सुओ अत्सुयुकि जी मुक्त छंद वाली हाइकु कविता के प्रवर्तक श्री ओगिवारा सेइसेंसुइ के शिष्य थे और उन की कई हाइकु कविताएँ 2011 से 2012 तक शूएइशा (एक प्रकाशक) से प्रकाशित "युद्ध और साहित्य" ग्रंथावली में भी संकलित हैं। उन के बारे में मुझे कोई जानकारी नहीं थी। फिर "नागासाकी मेज़ामेनो काई" (नागासाकी-जागरण-सभा) के मार्गदर्शक, श्री मोरिगुचि मित्सुगु जी ने इन श्रेष्ठ हाइकु कविताओं के बारे में मुझे सूचित करने की कृपा की। मोरिगुचि जी नई पीढ़ी के लोगों खासकर शैक्षिक भ्रमण से नागासाकी आए बच्चों को परमाणु बम-त्रासदी के बारे में आगाह करने का कार्य वर्षों से निभाते रहे हैं, इन हाइकु का अनुवाद अभी मुकम्मल नहीं है और कहना हो तो यह एक प्रारूप ही है, पर यह अनुवाद चौधरी जी को और मुझे भी बहुत पसंद आया है। जापानी कविता को हिंदी में अनूदित करते समय शब्दों को ज्यों का त्यों बदल दें तो कभी न कभी अनूदित हिंदी कविता की पंक्तियों से शक्ति और उत्साह की कमी का आभास मिलता है। सीधी-सादी, शांत अभिव्यक्ति पाठकों के हृततंतु को छू लें, यह जापानी कविता का एक आदर्श है। पर हिंदी कविता में इस तरह की अभिव्यक्ति हो तो अक्सर नीरस और शुष्क ही प्रतीत होती है। चौधरी जी यदा-कदा कहा करते थे, " यह शब्द हलका है, इस में शक्ति नहीं है।" अतः हम लोग सादे शब्दों के बदले बहुत कुछ ताकतवर शब्दों का प्रयोग करने पर मजबूर हो जाते थे। पर यह भी हद से ज्यादा कर देते तो कभी हिंदी की अभिव्यक्ति जापानी मूल से बहुत दूर छिटकी हुई जान पड़ती थी। यह संघर्ष हमेशा चलता रहा और अनुवाद-कार्य

का यह सब से कठिन सवाल रहा। अच्छा, आज मैं हाइकु का अनुवाद इस लिए प्रस्तुत करना चाहता हूँ कि हाइकु के मूलतः सीधी-सादी शांतचित लघु कविता होने के कारण उसे हिंदी में अनूदित करते समय अधिक शक्तिशाली या जोशीले शब्दों का प्रयोग करने की आवश्यकता नहीं है, ज्यों का त्यों अनूदित करने से ही बहुत कुछ सरस और हृततंतु को छू लेनेवाली पंक्ति बन जाती है। ऐसा मैं सोचता हूँ। कविराज रवीन्द्रनाथ ठाकुर ने भी कुछ जापानी हाइकु का बंगाली अनुवाद किया था। हाइकु की भारतीय भाषाओं से अप्रत्याशित रूप से खूब पटती है। आखिरकार अपने मुँह मियाँ मिट्ठू बन गया। आप लोग इन तीस हाइकु का अनुवाद देखें, मज़ा लें और कमियों को ठीक कर दें तो मैं बहुत कृतज्ञ हो जाऊँगा। धन्यवाद।

8 दिसंबर 2016

ओसाका विश्वविद्यालय के हिंदी विभाग की गोष्ठी में

# “परमाणु बम की छाया में ” को पढ़कर

चैतन्य प्रकाश योगी

नमस्कार।

इस संग्रह की कविताओं को पढ़ते हुए मृत्यु के बोध की भूमिका बार बार पुनरावृत्त होती है और ऐसा लगता है मानों मृत्यु का दृश्य अत्यधिक वीभत्स होकर प्रकट हो रहा हो।

फिर हठात!
काँच की किरचों ने निकाल लीं दोनों आँखें
उनके कोटरों में भर गया लहू और मवाद
धूएँ की तरह छा गए दरकते बादल
आख़री धूप पर्वत श्रेणियों पर अटक गई...

( ’अंधता’ ,तोगे सांकिचि, पृष्ठ,24 , *परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली )

मनुष्य ने मनुष्य के विरुद्ध घृणा और प्रतिशोध की अति से जो तांडव रचा था उसके शिकार मूक पशु और पक्षी भी हो रहे थे :

कसाईख़ाने की तरफ हाँके जा रहे पशु
नदी- तट की ओर लुढ़क गए
धूसर में एक अकेला कबूतर
अपने पंख समेटे धराशायी हुआ पड़ा है नदी- पुल पर

( ’धधक’,तोगे सांकिचि, पृष्ठ,22 , *परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली )

इस अन्यायपूर्ण हिंसा से केवल प्राणी जगत ही हताहत नहीं हुआ , बल्कि प्राणेत्तर सृष्टि भी मनुष्य की इस महामूढ़ता को सहने के लिए विवश हो गई थी :

यूरेनियम की तपिश- भरी किरणों ने
सूर्य को परे धकिया दिया
एक लयहीन मौन छा गया
समूचे अंतरिक्ष में

('धधक',तोगे सांकिचि, पृष्ठ,22 , *परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली )

इस संकलन की कविताएँ हिरोशिमा और नागासाकी की परमाणु बम विभीषिका के परिणामस्वरूप सृष्टि के प्रत्येक आयाम में व्याप्त नैराश्य, अवसाद,क्षोभ और शोक का भांति- भांति से चित्रण करती हैं। इन कविताओं को पढ़ते हुए दुख और पीड़ा की गहन अनुभूति से गुजरना पड़ता है। वेदना को प्रकट करती ये कविताएँ अपने प्रत्येक शब्द और पद में मनुष्य जाति को झिंझोड़ने और झकझोरने का अपना दायित्व भी भली भांति निभाती हैं।

मनुष्य दूसरों के मुक़ाबले स्वयं को श्रेष्ठ और उच्च जानने, मानने और साबित करने की प्रतियोगिता में यह भूल गया कि मृत्यु सबको बराबर कर देती है, आखिर यह देह मिट्टी हो जाती है और क्षुद्र अहम निरर्थक और निस्सार सिद्ध हो जाता है।

और देखो ! शाम के धुँधलके में
उठने लगा नदी का ज्वार
तट-भूमि को निगलता, हाथ पैरों को लीलता
रिस रहा सागर- जल
निःस्पंद पड़ी देहों के अनगिनत ज़ख़्मों में

( 'अंधता',तोगे सांकिचि, पृष्ठ,24 , *परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली )

इन कविताओं में यत्र- तत्र वीभत्स रस रिसता हुआ सा प्रकट होता है। महत्त्वपूर्ण तथ्य यह है कि सामान्य साहित्य की तरह इस संग्रह में संकलित कविताएँ कवियों की कल्पना से नहीं उपजी हैं, बल्कि ये एक अति क्रूर और असह्य यथार्थ से उत्पन्न भयानक पीड़ा और वेदना का जीवंत दस्तावेज़ हैं। आखिर इस दुर्दांत यथार्थ के लिए कौन उत्तरदायी था? बहुत सरल उत्तर हो सकता है कि इसके लिए कोई एक या कुछ देश उत्तरदायी थे। अन्य उत्तर हो सकता है कि परमाणु बम उत्तरदायी थे और परमाणु बमों के निषेध से इस क्रूरता का निराकरण किया जा सकता है। एक अन्य उत्तर यह भी हो सकता है कि इसके लिए युद्ध या युद्धवादी मानसिकता उत्तरदायी थी। इस प्रकार के सरल उत्तरों से समस्या को ढका अवश्य जा सकता, मगर सुलझाया नहीं जा सकता। एक प्रसिद्ध अमेरिकी लेखक की यह उक्ति विचारणीय है:

No country is so wild and difficult but men will make it a theater of war. Ambrose Bierce

वस्तुतः युद्ध के पीछे साम्राज्यवाद और अधिनायकवाद है और उसके भी पीछे मनुष्य की वर्चस्वकामी मानसिकता है, दूसरों को अपने अधीन करने, उन पर आधिपत्य स्थापित करने या उनको दबा कर या राजी कर अपने अधिकार में ले लेने की इच्छा ही इस समस्या के मूल में है। यह अधिकार स्थापित करने की इच्छा प्रेम के नाम पर,शांति,कल्याण या विकास के नाम पर भी होती है तो भी वह हिंसा का बीज ही होती है,जो अवसर पाकर क्रूरता के भयावह परिणाम में परिवर्तित हो जाती है। इसलिए इन कविताओं के सूक्ष्म संदेश को उचित संदर्भ में समझने के अपने अत्यंत लघु प्रयास के अंतर्गत मैं इस सदन के समक्ष यह निवेदन करना चाहता हूँ कि परमाणु बम के निषेध के अभियान मात्र से संतुष्ट हो जाना पर्याप्त नहीं है, बल्कि हम सबको अपने भीतर छिपे अहंकार को जानना होगा जो निरंतर अधिकार और वर्चस्व की कामना से ग्रस्त है। शायद अपने भीतर इस क्षुद्र अहं

की पहचान कर,इसकी निस्सारता को जानकर इससे मुक्त होने और रहने की अवस्था ही इस वीभत्स, भयावह और क्रूर यथार्थ के पुनरावर्तन की संभावनाओं को निरस्त करने की प्रक्रिया में हमारे व्यक्तिगत योगदान जैसा प्रयास होगा ।

इस काव्यसंग्रह की कविताओं में विध्वंस, विरोध,वियोग और विषाद जैसे भावों के साथ संकल्प का भाव भी है।

जला डाला हिरोशिमा शहर
तुम्हारे पिता,तुम्हारी माँ को छीन लिया तुमसे
तुम्हारी आँखों की उज्जवलता छीन ली
कुछ नहीं छोड़ा तुम्हारे हाथों में
मैं इस सच को बयान करूँगा
ज़रूर करूँगा...

('ओ प्यारे बच्चे!', तोगे सांकिचि, पृष्ठ,28 , *परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली )

परमाणु बम की विभीषिका जापान पर एक राष्ट्रीय संकट की भांति आई थी । उसके असहनीय त्रास का अनुभव क्षेत्रीय स्तर पर हुआ था। पर इस त्रासदी की पीड़ा से उपजी कविताओं में वैश्विकता का स्वर है और उस वैश्विकता में विश्व-शांति की आशा और विश्वास की अनुगूँज भी सुनाई पड़ती है।

विज्ञान की संपन्न फ़सलों पर
लगें विश्व- शांति के फल
सुबह- सुबह अंगूर के लदे- फदे गुच्छों पर
एकत्र ज्यों ओस के कण
....हम ऐसी ही सुबह का सपना देखते हैं ....

('सुबह',तोगे सांकिचि, पृष्ठ,32 , *परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली )

आशा और विश्वास से आस्था का जन्म होता है और आस्था प्रार्थना को प्रकट करती है। इस संग्रह में संकलित यह कविता सबके लिए और नवसृजन के लिए प्रार्थना का स्वर मुखरित कर रही है।

धधकती अग्नियों
और मृत्यु की स्मृति में
हमारी सच्ची प्रार्थनाएँ फलीभूत हों
सदाबहार, चिर- हरित
हिरोशिमा के 'डेल्टा' में
हरी कोंपलें सरसराएँ...

( 'सदाबहार',हारा तामिकि, पृष्ठ, 37 ,*परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली )

इस संग्रह में एक कविता राजनैतिक तेवर की भी है। इस कविता में सम्राट और साम्राज्ञी का आह्वान किया गया है कि वे खेलों के मैच देखते रहने के बजाय परमाणु निरस्त्रीकरण के अभियान में सहभागिता करें।
('मेरी बेचैनी', शोदा शिनोए,पृष्ठ 43, *परमाणु बम की छाया में*,साहित्य अकादेमी,दिल्ली)

इस संग्रह की कविताओं के मूल संदेश की यदि समकालीन हिन्दी कविता से अंतःक्रिया हो तो कुँवर नारायण की यह कविता इस संदेश से समस्वर होती प्रतीत होती है।

छोटी सी दुनिया

बड़े- बड़े इलाके
हर इलाके के बड़े- बड़े लड़ाके
हर लड़ाके की बड़ी- बड़ी बंदूकें
हर बंदूक के बड़े- बड़े धड़ाके
सबको दुनिया की चिंता
और सबसे दुनिया को चिंता

( 'दुनिया की चिंता',कुँवर नारायण,*कई समयों में*,पृष्ठ 68,भारतीय ज्ञानपीठ ,दिल्ली )

हिरोशिमा और नागासाकी की परमाणु विभीषिका से उपजे क्रूर त्रास को सहने के साथ वहाँ के नागरिकों ने जिस साहस और संकल्प शक्ति का परिचय देते हुए पुनर्निर्माण के जरिये विध्वंस की मानसिकता को समुचित उत्तर दिया था, उसी तेवर को प्रकट करती कुँवर नारायण की एक कविता यहाँ उल्लेखनीय है।

एक चक्रवात से अब मेरी दोस्ती हो गयी है
कभी कभी आता है वह
न जाने कहाँ से घूमता –फिरता
और मुझे तहस- नहस करके चला जाता है
इसी उम्मीद पर बनाता हूँ
फिर एक घर –सा सुंदर कुछ
कि जब भी वह आए
कुछ तो मिले उसे
अपनी शक्ति को आजमाने लायक
( 'चक्रवात',कुँवर नारायण,*कई समयों में*,पृष्ठ 69,भारतीय ज्ञानपीठ ,दिल्ली )

हिन्दी और उर्दू के महान कथाकार मुंशी प्रेमचंद ने अपने प्रसिद्ध उपन्यास रंगभूमि

के नायक सूरदास के माध्यम से विध्वंस के खिलाफ सृजन और सकारात्मकता को शक्ति की भांति स्थापित करने का उदाहरण प्रस्तुत किया था।

दुनिया की तमाम अन्यायपूर्ण,हिंसक और क्रूर घटनाओं और त्रासदियों का उत्तर व्यक्ति की अंतश्चेतना का सहज प्रतिनिधित्व करने वाले सृजनशील चित्त और परस्पर सहयोग के भाव में है।

मनुष्य का एक दूसरे के प्रति प्रेम, सौहार्द्र ,सद्भाव और साथ ही मनुष्येत्तर सृष्टि के साथ सहयोग और समन्वय का भाव ही परमाणु अस्त्रों के खतरे से आक्रांत विश्व के सामने एकमात्र वरेण्य मार्ग है।

अंत में अपने अथक परिश्रम, असाधारण क्षमता ,अद्भुत कौशल और विशिष्ट मेधा से इस संकलन का अनुवाद और सम्पादन करने वाले दिल्ली विश्वविद्यालय के प्राध्यापक आदरणीय डॉ. हरजेन्द्र चौधरी जी और यहाँ कार्यक्रम में उपस्थित आदरणीय श्री मिकी यूइचिरो जी को उनके इस अभिनंदनीय कार्य के लिए हार्दिक बधाई और साधुवाद देते हुए मैं अपनी बात समाप्त करता हूँ।

आप सब सुधीजनों ने मेरी बातों को ध्यान से सुना इसके लिए आप सबके प्रति मैं हृदय से अनुग्रहीत हूँ। बहुत बहुत धन्यवाद।

# 『原子爆弾の下で』を読んで（日本語訳）

チャイタニャ・プラカーシュ・ヨーギー

(Chaitanya Prakash Yogi)

みなさん、こんにちは。

ここに訳された詩を読みながら死というものについて何度も意識することになりました。まるで恐ろしい死の光景が目の前に浮かび上がってくるようでした。

硝子にえぐられた双眼が
血膿と泥と
雲煙の裂け間
山上の
暮映を溜め

（「盲目」, 峠三吉,『原子爆弾の下で』, p.22, 文学アカデミー, デリー）

（峠三吉,「盲目」,『英訳原爆詩集』,大原三八雄,編訳,1971,太平出版社,初出は『原爆詩集』1952？）

人間どうしの憎しみと復讐が演じる死の舞踏の犠牲になるのは、人間だけではない、罪のない動物や鳥も死んで行くのです。

屠殺場へ曳かれていた牛の群は
河岸をなだれ墜ち
灰いろの鳩が一羽
羽をちぢめて橋のうえにころがる。

（「炎」, 峠三吉, p.22, 『原子爆弾の下で』, 文学アカデミー, デリー）

（峠三吉,「炎」,『英訳原爆詩集』,大原三八雄,編訳,1971,太平出版社,初出は『原爆詩集』1952？）

この許しがたい殺戮によって生き物だけではなく、命を持たない世界も人類のこの愚行の犠牲とならざるをえなかったのです。

空間に堆積する
無限の沈黙
太陽をおしのけた
ウラニューム熱線は

（「盲目」, 峠三吉,『原子爆弾の下で』, p.22, 文学アカデミー, デリー）

これらの詩は広島と長崎の原爆の恐ろしさがもたらした世界に広がった絶望、苦悶、悲しみをさまざまに表現しています。この詩を読みながら私は深い苦痛を覚えます。深い悲しみを伝えるこれらの詩は、言葉によって人類を揺さぶり突き動かすという詩の務めを果たしています。

人間は自分が人より偉いのだと証明しようとして、死の前では誰もが平等であるということを忘れてしまいます。最後には、この肉体は土に帰り、自らが小さな存在であることが明らかになるのです。

河原に汐はよせ
汐は満ち
手が浸り脚が浸り
むすうの傷穴から海水がしみ入りつつ
動かぬものら

（「盲目」, 峠三吉,『原子爆弾の下で』, p.24, 文学アカデミー, デリー）

至る所に恐怖がにじみ出ているような気がします。重要なことは、これらの詩は、普通の詩のように詩人の想像力が生み出したものではないということです。そうではなくて、これらの詩はきわめて残酷で耐えがたい現実から生まれた恐ろしい痛みと悲しみの生きた証言だということです。いったい、この耐えがたい現実の責任者は誰なのでしょうか。簡単に答えるならば、それはある、あるいはいくつかの国家に責任があるということでしょう。別の答えは、原子爆弾が悪い、そして原爆を禁ずることでこの残虐を取り除くことができるということかもしれません。もう一つ別の答えもありえます。戦争もしくは戦争を好むことが悪いのだと。こうした単純な答えで問題をしばし覆い隠すことができるかもしれません、しかしそれで問題を解決することにはならないのです。有名なアメリカの作家の言葉は示唆に富んでいます。

No country is so wild and difficult but men will make it a theater of war. –Ambrose Bierce

実際、戦争の背後には帝国主義そして独裁、さらにその後ろには人間の支配欲があ

ります。他人を自分の思いのままに従え、彼らを自分たちの言いなりにさせようとする願いがこの問題の根本にあります。この権利をふるおうとする願望のもとに、平和、幸福、あるいは進歩の名のもとに、暴力の種がまかれ、その種は隙あれば残酷な果実を実らせようとします。したがって、これらの詩の訴えるメッセージを正しく理解するために、私は今日のセミナーに集まったみなさんに訴えたいと思うのは、原爆を禁止するだけで満足するのではなく、われわれすべてが自分の中にある常に他人を支配しようとするエゴイズムを認識する必要があるということです。おそらく自分の中の卑小な自己を知り、その無意味さを自覚することこそが、この悲惨と恐怖そして残酷な現実から立ち戻るための、私たち一人一人の努力に繋がるのだと思います。しかし、この詩の中には破壊、対立、怒り、無力そして悲嘆とともに、決意もあります。

ひろしまの町を焼き
おまえの澄んだ瞳から、すがる手から
父さんを奪ったか
母さんを奪ったか
ほんとうのことをいってやる
いってやるぞ！

（「ちいさい子」, 峠三吉,p.28, 『原子爆弾の下で』, 文学アカデミー, デリー）
（峠三吉,「ちいさい子」,『英訳原爆詩集』,大原三八雄,編訳,1971,太平出版社,初出は『原爆詩集』1952？）

原爆の恐ろしさは日本に国家的な危機をもたらしました。その耐えがたい苦しみの経験は日本という一つの国を越えて世界の声となり、世界平和への希望と信頼の声を世界に響き渡らせたのです。

豊饒な科学のみのりが
たわわな葡萄の房のように
露にぬれて
抱きとられる
朝を
ゆめみる

（「朝」, 峠三吉, p.32, 『原子爆弾の下で』, 文学アカデミー, デリー）
（峠三吉,「朝」,『英訳原爆詩集』,大原三八雄,編訳,1971,太平出版社,初出は『原爆詩

集』1952？）

希望と信頼から信仰が生まれます。そして信仰は祈りを生みます。この詩集にあるこの詩は朝と新生のための祈りの言葉を紡いでいます。

死と焔の記憶に
よき祈よ　こもれ
とわのみどりを
とわのみどりを
ヒロシマのデルタに
青葉したたれ

（「永遠のみどり」, 原民喜, p.37,　『原子爆弾の下で』, 文学アカデミー, デリー）
（「永遠のみどり」, 原民喜, 木下順二・堀田善衛　編 1970, 太平出版社, 初出は『原民喜詩集』1951）

ある詩には政治的な怒りが込められています。そこでは日本の天皇、皇后に向けて、鋭い声が投げかけられています。相撲や野球の試合を見る暇があるならば、核兵器廃絶運動に参加せよと。（「はがゆい」, 正田篠枝, p.43,　『原爆の雲の下で』, 文学アカデミー, デリー）

これらの詩の根本的なメッセージを、もし現代ヒンディー語の詩の中に探すとすれば、クンワル・ナーラーヤンのこの詩に同じ声を聞くことができるのではないかと思います。

小さな世界
大きな国
どの国にも大きな兵士
どの兵士にも大きな銃
どの銃からも大きな銃声
だれもが世界のことを心配するが
世界が恐れるのはそのだれもというやつだ

（「世界の心配」,『いくつかの時に』, クンワル・ナーラーヤン, p.68,　Bharatiy Gyanpith, Delhi）

広島と長崎の原爆の悲劇から生まれた無残なな苦しみに耐えつつ、市民たちは勇気と決意をもって破壊に対して再建で応えました。その勇気をクンワル・ナーラーヤンのこの詩は表現しているように思います。

ある嵐のやつといまではおれは友達だ
そいつはときどきやってきて
どこからともなく飛んできて
おれをむちゃくちゃにして去っていく
そいつがまたやってくるからには
きれいな家を一軒建てるのだ
またあいつがやってくるときに
おれの力はこうだぞと
すこしはあいつも思い知るだろう

（「暴風」,『いくつかの時に』, クンワル・ナーラーヤン, p.69, Bharatiy Gyanpith, Delhi）

ヒンディー語とウルドゥー語の偉大な作家ムンシー・プレームチャンドは有名な小説『舞台』の主人公スールダースを通じて、破壊に抗する創造と肯定の力を生み出す人間の姿を描きました。世界のあらゆる不正、暴力、そして残忍な出来事と苦しみに対する答えは、人間の中の想像力と精神そして互いに助けあう心にあります。人間同士の愛、優しさ、正しい心、そして人間を超えた世界との協同と融和の心が、原爆の危機に恐れおののく世界を救う唯一の道です。

最後に、たゆまぬ努力、たぐいまれなる才能、驚くべき巧みさと知性をもってこの詩集の翻訳をし、編集をされたデリー大学のハルジェンドラ・チョードリー先生、そして今日、ここにご出席の三木雄一郎先生に対して、今回の賞賛すべきそのお仕事に対して心からの敬意と感謝を申し上げて、私の話を終わることとします。

ご静聴、ありがとうございました。

（訳注：原爆詩の原作と「」内の出典及び書誌情報については、三木雄一郎氏よりご教示いただきました。）

# “परमाणु बम की छाया में” को पढ़कर

अशिमा मेहता

जैसा कि हम सब जानते हैं, आज के परिसंवाद के केन्द्र में हिरोशिमा और नागासाकी पर क्रमशः 6 अगस्त और 9 अगस्त 1945 को हुए परमाणु हमलों से त्रस्त मनुष्यता की मर्मस्पर्शी संवेदना की प्रतिनिधि जापानी कविताएँ हैं, जिनका हिन्दी अनुवाद हाल ही में साहित्य अकादमी, दिल्ली से पुस्तक के रूप में “परमाणु बम की छाया में” शीर्षक से प्रकाशित हुआ है।

इस पुस्तक में संकलित कविताओं के बारे में इसी पुस्तक के प्रारंभ में अनुवादक द्वय श्री मिकि यूइचिरो जी और श्री हरजेन्द्र चौधरी जी द्वारा लिखी गई भूमिका में बहुत सारगर्भित है। मैं भूमिका के कुछ अंशों को पढ़कर अपनी बात प्रारंभ कर रही हूँ।

“इन कविताओं में वर्तमान विश्व में व्याप्त राजनैतिक विधा और सांस्कृतिक द्वैत के प्रतिबिंब दिखाई पड़ते हैं। मानवीय पीड़ा, भय और अस्तित्व मात्र की रक्षा, चिंता तथा साहसिक सक्रियता के बीजों से निकली ये कविताएँ मनुष्यता को टेरती मनुष्यता ही की पुकार है। ये कविताएँ परमाणु विस्फोट के बहुआयामी और अनेकस्तरीय खतरे का खाका हमारे सामने पेश करती हैं।”

अब इस संकलन की बाल कविताओं की चर्चा करते हुए लगभग 70 वर्ष पूर्व घटित हुई महाविनाशकारी घटना की सिरहन को महसूस किया जाए। इन कविताओं के बारे में पुस्तक की भूमिका में लिखा गया है। हिरोशिमा जनपद के स्कूलों में अध्ययनरत अनेक बच्चों द्वारा लिखी गई कविताएँ शामिल हैं जो कि सहज और प्रभावपूर्ण अभिव्यक्तियाँ कही जा सकती हैं। इन कविताओं में अनुभव की बहुत तीखी आँच है, जिसमें से फूटती तपिश हमारी संवेदना के बहुत भीतर तक पहुँचने में और वहीं कहीं बस जाने में समर्थ है। मानवीय दुख की पराकाष्ठा से साक्षात्कार कराने वाली ये कविताएँ मनुष्य नामक प्राणी के भीतर मौजूद क्रूरता और करुणा की अतियों के दस्तावेज जैसी प्रतीत होती हैं।

संकलन की यह कविता हालात की विकटता को  सहज ही व्यक्त करती है।

मैं तरस रही हूँ उनका चेहरा देखने को
चाहे सपने में ही दिख जाए, पर दिखे तो सही
पापा ! पापा !  पुकारना चाहती हूँ
उनकी उंगली थाम उन्हें अपने पास खींच लेना चाहती हूँ

यह कविता प्रार्थना या पुकार के रूप में ध्वनित होती है परंतु वह मांग, वह प्रार्थना, वह पुकार ठुकराई जा चुकी है, जिनको संबोधित किया जा रहा है वे परिजन और प्रियजन संसार से जा चुके  हैं। पुकार और प्रार्थनाएँ प्रतिध्वनित होकर लौट आती हैं और प्रश्न अनुत्तरित रह जाते हैं। फिर भी इन सब का सिलसिला समाप्त नहीं होता, क्योंकि जीवन में कोशिशें और उम्मीदें खत्म नहीं होतीं, मनुष्य सपने देखना नही छोड़ता। विभीषिका और त्रासदी ऐसी आर्त्त पुकारों को जन्म देती हैं जिनका कोई अंत नहीं होता।

यह है मनुष्य
परमाणु बम की करामात तो देखो

मानवीय देहें फूलकर घिनौनी हो गई हैं
अपनी- अपनी पहचान खो बैठी हैं जनानी- मर्दानी देहें
बदरंग, झुलसे, विकृत चेहरे पर के
सूजे हुए होंठों से निकलती आर्त्त  पुकार

‘बचाओ ! बचाओ ! ’
‘त्राहिमाम् ! त्राहिमाम् ! ’

इस कविता को पढ़ने से ऐसा लगता है कि एक तरफ़ तो मनुष्य का क्रूर रूप दिखाई देता है जिसने शक्ति को प्रदर्शित करने के लिए परमाणु बम का इस्तेमाल कर लाखों लोगों को तहस नहस कर दिया। वे लोग अपनी पहचान खो चुके हैं, आदमी औरत के भेद का पता लगाना भी मुश्किल (नामुमकिन) मालूम पड़ता है और दूसरी तरफ़ वही मनुष्य का बेबस रूप है जो त्राहि त्राहि मचने पर बचाओ बचाओ पुकार रहा है। विभीषिका विलाप को जन्म देती है। हिरोशिमा त्रासदी से उपजा विलाप ओओहिरा यामादा कानुको की कविता में इस प्रकार व्यक्त हुआ है।

विलाप

जो जा चुके हैं, लौट कर नहीं आ सकते
जो जा चुके हैं, रो नहीं सकते
जो जा चुके हैं, उनके पास रोने का कोई उपाय नहीं बचा है
जो जीवित बच गए हैं, वे क्या करें
जीवित बचे लोगों को क्या समझना चाहिए
जो जीवित बच गए हैं
वे दुख को तोड़ते चलते हैं
स्मृति को निष्क्रिय करते चलते हैं

जो जीवित बच गए हैं
वे चलते हैं भावहीन मुखौटों को संभाले- थामे...

इस कविता से यह स्पष्ट होता है कि जो व्यक्ति विस्फोट में मारे जा चुके हैं वे चाह कर भी कुछ व्यक्त नहीं कर सकते और ना ही लौटकर वापस आ सकते हैं। लेकिन जो ज़िंदा बच गए हैं, वे क्या करें? उनकी स्थिति तो शायद मृत व्यक्तियों से भी बदतर मालूम पड़ती है क्योंकि जो मिट गए हैं वे तो सब कष्टों और पीड़ाओं से मुक्त हो चुके हैं। लेकिन

जो बच गए हैं वे जीते जी मर रहे हैं, प्रतिपल मर रहे हैं। सूखी आँखों और भावशून्य चेहरों के साथ।

अंत में वह कविता उद्धृत करने जा रही हूँ जो पुस्तक के प्रारंभ में है, लेकिन इस कविता में इस संग्रह के समाहार का बोध है।

मुझे मेरा पिता लौटाओ
मेरी माँ लौटाओ
दादा- दादी लौटाओ
मेरी संतानें लौटाओ
मुझे मेरा 'आत्म' लौटाओ
मनुष्यता लौटाओ

जब तक पृथ्वी पर जीवन है
तक तक के लिए
अमर-अनंत-अखंड शांति लौटाओ

इस कविता से मनुष्य की पुकार की प्रतिध्वनि सुनाई पड़ती है। वह पुकार उसके अपनों को लौटाने की है, वह पुकार वह सब लौटाने की है जो इस त्रासदी में खो गया है। वह अपने आत्म को लौटाने की मांग कर रहा है। साथ ही ऐसी शांति की जो कभी न मिट सके और न ही छीनी जा सके और जिसको कोई भी भंग न कर सके।

# 『原子爆弾の下で』を読んで（日本語訳）

アシマー・メヘター（Ashima Mehta）

今日のセミナーの議論の中心にあるのは、広島と長崎に1945年8月6日と9日に落とされた原子爆弾によって傷ついた人間性の痛ましい苦しみを伝える日本語の詩です。その詩のヒンディー語訳がデリーのインド文学アカデミーから本として『原子爆弾の下で』のタイトルで出版されました。

この本に収録された詩について、翻訳者の三木雄一郎さんとチョードリーさんによって書かれた序文の中で大切なことが述べられています。私は序文を読むことで私の話を始めようと思います。

これらの詩の中には、現代世界の政治的な手法そして文化的な対立が反映されています。人間の苦しみ、恐れ、そして命そのものを守れるかどうかについての不安、さらには勇気を振るって戦おうとする種から芽生えた詩が、人間性の叫びを伝えているのです。これらの詩は、原爆の爆発がもたらす恐ろしい危険についてその多様で多面的な姿を示しています。

この詩集の中の子供が書いた詩について語ることで、およそ70年前に起こった世界の破滅と、その戦慄を感じ取ってみましょう。広島市の学校で勉強していた多くの子供たちが書いた詩がここに含まれています。そこには自然でしかも力強い表現があります。これらの詩の中には、実際に体験された激しい炎があり、そこから伝わる熱は私たちの心の奥深くにまで届き、そこにいつまでも残ります。

人間の悲しみの極点を伝えるこれらの詩は、人間という生き物の中にある残酷さと悲しみの行き着くところがどこなのかを示しているようです。

一どでもいい、ゆめにでもあってみたいおとうちゃん
おとうちゃんとよんでみたい、さばってみたい

（柿田佳子,「おとうちゃん」,画集『小さな祈り』,鹿和雄・画,吉永小百合編,1998,汐文社,初出は詩集『原子雲の下より』,峠三吉,山代巴,1952）

しかし、この詩の祈りと呼びかけの声に答える人はいません。呼ばれた人たちは家族や愛する人たちから遠く去って行きました。呼び声、祈りはこだまするだけでむなしく

帰ってきます。問いかける声は答えをもらえないのです。それでも、呼びかけは続きます。なぜなら、生きるということの努力と希望は決してなくなることはないからです。人間は夢を見ることをやめません。恐怖と苦しみが生み出す悲痛な叫びは終わることがありません。

コレガ人間ナノデス
原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ
肉体ガ恐ロシク膨張シ
男モ女モスベテ一ツノ型ニカヘル
オオ　ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ
爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ
「　助ケテ下サイ」

（原民喜,「コレガ人間ナノデス」,『日本原爆詩集』,大原三八雄・木下順二・堀田善衛　編,1970,太平出版社,初出は『原民喜詩集』,1951）

この詩を読むと、自分の力を示したいばかりに、原爆を落として何十万もの人を滅ぼしてしまう人間の残忍な姿があります。人間が人間でなくなるのです。男か女かも分からなくしてしまうのです。そして、一方では、たすけて、たすけてと悲鳴を上げ続ける人間がいるのです。

恐怖から嘆きが生まれ、広島の悲劇から生まれた嘆きは大平（山田）数子の詩の中でこう聞こえてきます。

逝ったひとはかえってこれないから
逝ったひとは叫ぶことが出来ないから
逝ったひとはなげくすべがないから

生きのこったひとはどうすればいい
生きのこったひとはなにがわかればいい

生きのこったひとはかなしみをちぎってあるく
生きのこったひとは思い出を凍らせてあるく
生きのこったひとは固定した面（マスク）を抱いてあるく

（大平（山田）数子,詩画集『小さな祈り』,男鹿和雄・画,吉永小百合・編,1998,汐文社,初出は『広島の詩』, 1955？）

爆発で死んだ人たちは、そうしたいと思っても何も言うこともできず、また戻ってくることもできない。しかし、生き残った人たちは、どうすればよいのか。おそらく死んだ人たちよりもつらいのです。なぜなら、死んだ人たちはあらゆる苦しみや痛みから解放されている。しかし、生き残った人間たちは生きながら死んでいる。今この瞬間にも死んでいっている。涙の涸れた目と表情の消えた顔をして。

最後に詩集の最初にある詩を引用します。そこにはこの詩集のすべてが込められていると思うからです。

ちちをかえせ　ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ

わたしをかえせ　わたしにつながる
にんげんをかえせ

にんげんの　にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを
へいわをかえせ

（峠三吉,詩画集『小さな祈り』,男鹿和雄・画,吉永小百合編,1998,汐文社,初出は,『原爆詩集』,1952,序）

この詩の中から、人間の叫びが聞こえます。その叫び声は自分のものを返してくれと訴えます。この悲劇が失わせたものを返せと。詩人は自分自身を返せと叫びます。同時に、決して終わることのない永遠の平和を返せと。奪われることのない、だれも壊すことのできない平和を。

（訳注：原爆詩の原作と（　）内の出典及び書誌情報については、三木雄一郎氏よりご教示いただきました。）

# 『原子爆弾の下で』を読んで

ヒンディー語専攻４年生　岩瀬　安奈（Iwase Anna）

今回『原子爆弾の下で』を読むにあたって、初めて日本語の詩をヒンディー語で読む機会を得ました。普段はヒンディー語を日本語に訳すことが多いため、とても新鮮な経験でした。この詩集を読んで私が初めに思ったことは、「インドの多くの人々がこの詩集に出会い、戦争と原子爆弾の危険性について少しでも考えてほしい」ということです。この本には耐えきれないほどの苦しみと悲しみ、切なさが詰まっています。

原爆の悲劇によって、大勢の人間が痛みと苦しみの中もがきながら死んでいきました。あの一瞬の爆発ですべてのものは灰になってしまった…その様子は、地獄よりもひどい状況だったと聞きます。

今日本は、見かけ上ではすべて元通りになったように思います。戦争の経験をした人は高齢になり、話を聞く機会も少なくなりました。日本人はだんだん戦争と原爆のおそろしさを忘れていっている気がします。私たち若者はその実体験をしていないからです。しかしだからといって忘れていいものでは決してありません、日本は原爆を落とされた世界で唯一の国です。全世界の人々に、これらの危険性やおそろしさを伝える責任が私たちにはあります。

近年、核は抑止力であり、平和のために必要なものであるといわれています。その考え方が間違っているとは思いませんが、今一度考えてみてほしいと思います。もし原爆を使用することになれば、多くの人間の命が失われ、残された人々も悲しみの中に沈むことになるでしょう。この本を読んで、自分のこととして想像してみてください。「もし原爆によって自分に関係のある人々の命が奪われ、自身も痛みと飢え、喉の渇きに苛まれながら死んでいくことになったとき、なにを思うのだろう？」と。

この詩集のおかげで、こんなふうに原爆を自分のこととしてあらためて考える機会を与えてもらいました。そして、その中で私の心にひとつの疑問が浮かんできました。「原爆は本当に必要なものなのだろうか？」

# “परमाणु बम की छाया में” को पढ़कर

हिंदी विभाग, चौथी कक्षा, ईवासे अन्ना

‘परमाणु बम की छाया में’ पुस्तक के माध्यम से हिंदी में जापानी कविता को पढ़ने का मुझे पहली बार मौका मिला। यह पुस्तक पढ़ने के बाद मैंने सोचा कि भारतीय लोगों को इस पुस्तक को ठीक से पढ़ना चाहिए और युद्ध और परमाणु बम के इस्तेमाल के खतरों के बारे में विचार करना चाहिए।

इस किताब को पढ़ते हुए अत्यंत दुख और कष्ट की अनुभूति होती है। बम की विभीषिका के बाद ज़्यादातर लोगों की कष्ट और पीड़ा में मृत्यु हो गई। परमाणु बम के विस्फोट के बाद सब भस्म हो जाते हैं। एकदम नरक से भी बदतर हालात पैदा हो जाते हैं।अब जापान में सब स्थितियाँ देखने में ठीक हो गई हैं। युद्ध को जाननेवाले लोग पूरी तरह बूढ़े हो गए हैं। पर ऐसा लगता है की जापानी लोग युद्ध और परमाणु बम की भयावहता को धीरे-धीरे भूल रहे हैं। क्योंकि हम युवा लोग अब उसे अनुभव नहीं कर पाते हैं। पर जापान दुनिया में अकेला देश है जिसने परमाणु बम की त्रासदी को भोगा है। इसकी भयावहता से सारी दुनिया के लोगों को अवगत कराना हमारी जिम्मेदारी है।

इन दिनों कहा जा रहा है परमाणु बम दुनिया की शांति के लिए आवश्यक है। यह खयाल सही भी हो सकता है। लेकिन यह भी सोचिए, अगर परमाणु बम का इस्तेमाल करेंगे, तो बहुत लोग मारे जाएँगे, और बाकी लोग दुख में डूब जाएँगे।

यह किताब पढ़िए और कल्पना कीजिए। “अगर परमाणु बम के विस्फोट से हमारे संबंधी लोगों की मृत्यु हो जाए और हम स्वयं भी पीड़ा, दर्द, भूख और प्यास से तड़पते हुए मरने लगें तो उस समय कैसा लगता है?” यह पुस्तक पढ़ते हुए बार बार इसे अनुभव करने का अवसर मिलता है और मनोमस्तिष्क में एक ही प्रश्न कौंधता है-------“क्या परमाणु बम ज़रूरी है”?

# हमें सीखना चाहिए

हिंदी विभाग, तीसरी कक्षा, नाकानिशि वातारू

नमस्कार।

मैंने इस पुस्तक में संकलित कुछ कविताओं को पढ़कर चिंतन करने का प्रयास किया है। यहाँ मैं अपने आलेख में कुछ कविताओं के उदाहरण देते हुए इस पुस्तक के मर्म को स्पष्ट करना चाहता हूँ। "मैं तुम्हारे लिए तरस रही हूँ माँ!" (पृष्ठ, १३८) में एक बेटी को अपनी मृत माँ की बहुत याद आती है। "निष्फल ही रहा मेरा मनोरथ" इस वाक्य में उसके अपनी माँ से हुए वियोग की भावना प्रकट होती है।

दूसरी कविता "परमाणु बम से मरे केन की प्रिय आत्मा को समर्पित छह पद" (पृष्ठ, ९२) में अपने लापता हो गए प्यारे बच्चे को ढूँढ़ने की माँ की तीव्र इच्छा स्पष्ट रूप से अभिव्यक्त हुई है। परमाणु बम ख़तरनाक और भयानक शस्त्र है, वह केवल अवसाद व विषाद ही पैदा करता है। लेकिन कविता के अंत में माँ कहती है, "दिल कड़ा करके चेहरा उठाती हूँ, आँसू पोंछती हूँ"। इस कविता को पढ़कर मुझे एक प्रकार की आशा और ताक़त की अनुभूति हुई जो हिरोशिमा के लोगों में परमाणु बम की त्रासदी भोगते हुए भी मौजूद थी।

तीसरी कविता "यह है मनुष्य" (पृष्ठ, ३९) इस अंतर्विरोध को स्पष्ट करती है कि मनुष्य ने पहले अपनी सुविधाओं और आराम के लिए तकनीकी विकसित की, लेकिन वही तकनीकी उलटे मनुष्य को मारने का एक भयानक साधन बनकर रह जाती है।

चौथी कविता "मंद मंद गंध" (पृष्ठ, १८२) की इस पंक्ति को देखिए, "मेरी दादी जी कहा करती थीं, " दरख्त में खुदा बसता है"। इसको पढ़कर ऐसा पता चलता है कि जापानी लोग सारी प्रकृति में ईश्वर के होने को मानते थे। और इसी कविता की अंतिम

पंक्ति भी देखिए , “बिना किसी प्रतिरोध के मानवीय मूर्खताओं को प्रेषित करने के इसके संकल्प को मैं दृष्टि उठाकर देखती हूँ ”। यहाँ मुझे मनुष्य की स्वार्थपरता और मूढ़ता दिखाई देती है।

परमाणु बम ने हिरोशिमा और नागासाकी को नष्ट कर दिया था। जब १९४५ के अगस्त माह के पहले सप्ताह में सुंदर नीले आकाश में परमाणु बम का विस्फोट हुआ, तब से अब तक बहुत से लोग अपने प्रियजनों से हमेशा के लिए अलग हो गए हैं। और परमाणु बम ने न केवल लोगों को बल्कि प्रकृति को भी गंभीर क्षति पहुँचायी थी।

यह पुस्तक परमाणु बम के द्वारा प्रकृति और मनुष्यता पर हुए हमलों के परिणामस्वरूप उपजी पीड़ा और दर्द को बख़ूबी प्रकट करती है। इस पुस्तक की कविताओं को पढ़ना हम सबके लिए इसलिए जरूरी है कि अपने इर्द गिर्द और अपने भीतर व्याप्त हिंसा और क्रूरता को हम समझ सकें और उसके पार उठने का एक ज़रिया प्राप्त कर सकें, तभी शायद इस पुस्तक के प्रकाशन का उद्देश्य पूरा हो पाएगा।

धन्यवाद।

# 私たちの学ぶべきこと

中西　渉 (Nakanishi Wataru)

私はこの度、この本に編纂されているいくつかの詩を読み、思考を巡らせて参りました。ここでは、二、三の詩を例にとり、この本の核となる訴えについて皆様のまえにて明らかにしたいと考えております。

『お母さん、私は貴女を想っています』においては、ある少女が亡くなった母親の良き思い出を回想しています。「私の望みは薄くなるばかりでした」この表現にて、母親との離別の念が現れ出ております。

２つ目の詩、『原爆に消された愛しのけんの魂に捧ぐ六行』では、行方不明となった愛する息子を探し出そうとする母親の激情が表されております。原爆は危険で恐ろしい兵器であり、失意と悵然しか生みません。しかし、詩の結びの部分で母親が、「心を強く持ち、上を向いて涙を拭くのであります」と言うように私はこの詩を読み、原爆の悲劇

を受け止めつつも、深層部分に根付く広島の人々のある種の勇気と力を感じました。
３つ目の詩、『人間とは』においては、当初は人類が自らの利便性の追求のため発展させてきた技術が翻って人類を破滅に導く恐ろしい手段に取って代わってしまったという矛盾について説いております。
４つ目の詩、『薄暗き匂い』のある部分、「昔おばあさんが木には、神様が宿っていると言っていた」をご覧下さい。日本人は、すべての自然に神が宿っていると信じているということがわかります。またこの詩の最後の部分もご覧になって頂きたいのですが、「どんな抵抗もなく人類の愚かさを表すこの創造物を私はしっかりと見ている」この部分を読み私は、人類の自己中心性と愚かさを垣間見ました。
原爆は、広島と長崎を破壊しました。1945 年の 8 月の初週の青く輝く美しい大空に原爆が炸裂したその時から今まで多くの人が愛するものに会えずにいます。また原爆は人間だけでなく自然にも壊滅的な被害を及ぼすことになりました。
この本は、原爆によって自然と人間への被害の結果としてもたらされた痛みを完璧に表しています。この本に編纂されている詩を読むことは、我々が自らの周りの人々と己の内に潜む残忍さと冷酷さを理解し、それらを乗り越えるためのある 1 つの源を手に入れることと同義であるという点でとりわけ必要なことであります。そして、その暁にはこの本が世に広まることの目的が達成されるように感じます。
有難う御座いました。

# いくつかの詩を読んで

ヒンディー語専攻３年生　日高航洋（Hitaka Koyo）

　こんにちは。この本のそれぞれの章から私の選んだ一つの詩について、自分の思いをここで述べたいと思います。

第１章
人間は１人で（孤独であると）生きることはできないのです。なぜなら、人の生活と平和には深い関係があるからです。
第２章
私は、この話の中に、原爆の爆発の痛みを感じ取ることができます。広島の爆弾の爆発で、人間だけでなく、自然や環境も一瞬で壊滅してしまうほど、他の全ての物も無くなってしまったのです。
第３章
命をなくした者は何もすることができません。しかし、生きている者ですら、（この戦争という状況の中では）何もすることができないのです。なぜなら、人間は、人間と共存してこそ生きることができるからです。この話を読んで、私は、爆発によって苦しめられた人々の人生の価値が失われてしまったと痛感しました。
第４章
マツナガの妻は、生きていたとき、悲しみでただひたすら泣いていたのです。彼女は、彼の世話をしていましたが､原爆で亡くなりました｡この行を読んだところ､妻の死後、彼女は自分にとって大切な存在であったことが、夫に強烈に感じられたのでは、と思いました。
第５章
原爆の攻撃の中で、「広島」はすべてを失いました。原爆の損害は非常に大きかったのです。私は、詩人であるオオハラさんのこの詩の中で、人々の古き日々が戻ってきてほしい、という希望を感じ取りました。
第６章
当時、広島にいなかった人々は、原爆では傷を負いませんでした。この詩を読んで私が思ったことは、原爆によって負傷した子供をからかうことだけは、許せないということです。負傷した女の子も日本のために自分のできる貢献をしているというのに､､､
第７章

詩人のイトウさんは助かりました。しかし、「私は、当時のことを今でも思い出すことはできない」と彼女は言います。これを読んで、原爆の影響が、当時のことを思い出すことすら苦痛に感じるほど恐ろしいものであったのだと、私は思いました。
第 8 章
詩人の家族は原爆で壊滅してしまいました。彼らはこの詩で、自分の置かれたものすごい状況を描写しています。この詩を読んで分かったことは、戦争で苦しめられたのは日本人だけでなく、それどころか、当時日本にいた他の国々の人々でもあるということした。
第 9 章
原爆の威力は、石段に人影が焼き付けられるほど、強烈なものでした。放射線は今も人の命を奪い続けています。この詩で原爆の脅威を感じました。
第 10 章
ある女性の子供が原爆の爆発で亡くなりました。しかし、彼女の大きな愛情は失われませんでした。戦争のことを考えながら、私は胸が痛みました。
ありがとうございました。

# कुछ कविताओं को पढ़कर

हिंदी विभाग, तीसरी कक्षा,  हीताका कोयो

नमस्कार।

इस पुस्तक के प्रत्येक खंड से ली गई एक एक प्रतिनिधि कविता पर मैं अपने विचार यहाँ प्रस्तुत कर रहा हूँ।

खंड 1

मनुष्य अकेला नहीं रह सकता है। इसलिए लोगों के जीवन और शांति के बीच में गहरा संबंध है।

खंड 2

मैं इस कविता में परमाणु बम के विस्फोट से हुई क्षति को महसूस कर सकता हूँ। हिरोशिमा बम विस्फोट में मनुष्य ही नहीं, बल्कि अन्य सारी चीज़ें, यहाँ तक कि प्रकृति और पर्यावरण भी, क्षण भर में नष्ट हो गए थे।

खंड 3

जो जा चुके हैं, कुछ कर नहीं सकते। लेकिन, जो जीवित बच गए हैं, वे भी कुछ कर नहीं सकते। क्योंकि मनुष्य सिर्फ मनुष्य के साथ ही रह सकता है। इस कविता को पढ़कर मुझे लगा कि  विस्फोट से पीड़ित लोगों की ज़िंदगी का मूल्य खो गया था।

खंड 4

जब मात्सुनागा जी की पत्नी जीवित थी, तब  वह दुख से सिर्फ रो रहा था। उस पत्नी ने उसकी सेवा की, लेकिन वह आखिर परमाणु बम से मर गई। ये पंक्तियाँ पढ़कर मुझे लगा कि पति को उसकी पत्नी के देहांत के बाद यह अहसास बहुत तीव्र हुआ कि उसके लिए पत्नी बहुत महत्त्वपूर्ण थी।

खंड 5

हिरोशिमा ने परमाणु बम के हमले में सब खो दिया था। वह क्षति बहुत बड़ी थी। मैंने कवि ओओहारा जी की इस कविता में आशा को महसूस किया कि हिरोशिमा में लोगों के पुराने दिन वापस आएँगे।

खंड 6

उस समय जो लोग हिरोशिमा में नहीं थे, वे परमाणु बम से घायल नहीं हुए थे। इस कविता को पढ़कर मैंने सोचा कि परमाणु बम से ज़ख़्मी हुए बच्चों को किसी हालत में भी छेड़ना नहीं चाहिए। क्योंकि वे लड़कियाँ अपने प्रिय देश जापान के लिए यथाशक्ति योगदान कर रही थीं।

खंड 7

इतो जी जीवित बच गई हैं। लेकिन वह कहती है कि मैं उस समय को अब भी नहीं देख सकती। यह पढ़कर मुझे लगा कि परमाणु बम का प्रभाव इतना भयानक था कि उसे याद करना भी कष्टकारी है।

खंड 8

कवि का परिवार परमाणु बम से नष्ट हो गया है। इस कविता में उन्होंने अपनी दारुण स्थिति का वर्णन किया है। इस कविता को पढ़कर यह पता चलता है कि युद्ध के पीड़ित केवल जापानी ही नहीं, बल्कि अन्य देशों के लोग भी थे जो उस समय जापान में थे।

खंड 9

परमाणु बम का प्रभाव इतना तीव्र था कि इसने पत्थर की सीढ़ियों पर मनुष्य की छाया छाप डाली। रेडियोधर्मिता अब मनुष्यों के प्राण हरती रहती है। मैंने इस कविता में उसका भय महसूस किया।

खंड 10

एक औरत  के सभी बच्चे परमाणु बम के हमले में मारे गए। लेकिन उसकी लोगों के प्रति प्रेमभावना कभी नहीं मरी। मुझे तो युद्ध की कल्पना करने मात्र से पीड़ा होने लगती है। धन्यवाद।

# 原爆詩　ヒンディー語訳出版記念のセミナーに参加して

ヒンディー語専攻２年生　中西優紀子（Nakanishi Yukiko）

私は詩を書くことと読むことが小さい頃からとても好きなので、この講演会の存在を知ったとき、すぐに行くことに決めた。詩というのは事細かに説明がなく、想像する部分が多いことが何よりの魅力で以前から好きだった。今回も参加する前は日本語の詩のような言葉の余韻や比喩などを想像していた。言語の違いを想像せず、言葉の持つ音や味わいをイメージしていた。

今回、講演会に参加して言語という壁を超えたもの（とりわけ、日本の詩がヒンディー語に訳されたもの）に触れたのは初めてだった。最初は意味を追いかけようと詩を読み始めてしまったため、私のヒンディー語の力の不足から日頃、詩を読むときのように花開くようにイメージがあふれ出すことがなく、自分は詩を読んでいるのに、、、どうしてと少し戸惑った。

しかし、音の反復を感じる詩を読んだとき、突然イメージが広がった。ヒンディー語を通して日本人の表情のイメージが広がったのは初めてかもしれない。

ヒンディー語は日本語と違って一つの言葉に非常にたくさんの意味が含まれていることは以前から感じていた。それゆえ、日本語の詩を筆者の思い通りにヒンディー語に訳すことは困難だろうと思っていた。ただ、今回いくつかの詩を読んでみて、筆者の思い通りかどうかは分からないが、（訳すという行為を行うにあたって当然のことだと気づいた）一つ一つの言葉が私のイメージを掻き立てた。これまで私が読んできた詩は全体の中の一つの言葉としての味わい方が多かった。しかし、今回、一つの言葉が全体にもたらす影響の大きさを感じた。

おそらく、インドで書かれたヒンディー語の詩を読む場合、概念的にも日本人と異なるため、理解が困難な部分が多かったと思う。しかし、今回、原文は日本のものということで表現が理解しやすかったのかもしれない。いづれにしても、今回は三木先生とチョードリー先生がいかに一つ一つの言葉を大切に扱われたのかが伝わってきた。

ヒンディー語を通して日本人のイメージ、原爆という傷跡のイメージが広がるという感覚はすごく新鮮だった。今の私には到底、真似ることはできないが、言葉というものへの向き合い方を改めて考えさせられた。予習さえできれば、この物語さえ、理解でき

ればという狭い言葉への向き合い方に陥ってしまっていた自分に気づかされた。言語力を高めるにはもちろんひたむきな努力が欠かせないと思うが、その過程において言葉の扱い方をおろそかにしてはならないと思った。私が魅力を感じている言葉への向き合い方を思い出しつつ、これからの学習に励んでいきたいと思うきっかけになった。

# セミナー進行の記録

ヒンディー語専攻２年生 後藤大輝, 中西優紀子

(Goto Daiki, Nakanishi Yukiko)

後藤　1945 年 8 月 6 日、9 日、それは人類の歴史の中で最も黒歴史として記憶されていることでしょう。
中西　国境と軍隊に自らの運命と将来を模索する人間の誕生はこれらのどちらの日においても残忍な暴力の極地へと渡ってしまいました。(限度を超えてしまいました)
後藤　広島と長崎に起こった核攻撃の恐ろしさは決して忘れることはできせん。大地から天地までこだました叫び、すすり泣き、嘆き、そして悲しむべき恐ろしい沈黙、これらの恐ろしさを記憶することは余儀ないことです。(使命です)
中西　これらの二つの街に行われた残忍な攻撃ののちの辛辣な痛みを伝えるために日本の詩のヒンディー語訳を日本の三木雄一郎さんとインドの教授であり文学者であるハルジェンドラ・チョードリーさんが類稀なる努力と使命感により作成しました。
後藤　この翻訳は一つの本という形で、今年の 8 月にデリーにある文学アカデミーから出版されました。
中西　本日は『原子爆弾の下』にて、という本について、話し合い、意見を交換するためにこちらにお集まりいただきました。
後藤　まず初めに、この活動を始め、翻訳を行った三木さんを前にお招きしたいとおもいます。皆様、盛大な拍手でお迎えください。
中西　このミーティングには溝上先生もお越しになられています。溝上先生を前にお呼びしたいと思います。
後藤　並びに、私たちの教授、そして私たち全員を励まして下さる高橋明先生を前お呼びしたいと思います。盛大な拍手と共にお二人の教授、溝上先生と高橋先生をお迎えください。
中西　本日の会には長崎先生、小磯先生、ヨーギー先生、松木園先生もお越しくださっています。それでは、これから、この本に編集、そして翻訳された詩について話していきたいと思います。ヒンディー語の二回生の奥山くんが詩を読んでくれましたので、それをお聞かせします。彼は本日、別の授業があり学んでいます。
後藤　寛太さんの感情のこもった発表の後は、もう一つのテーマへと参りたいと思います。

中西　それではヒンディー語の三回生の日高航洋さんを、この編算の詩について書いた彼の考えを発表していただきます。それではお呼びいたしましょう、航洋さん。
後藤　航洋さんの示唆に富んだ発表の後はヒンディー語の三回生の中西渉さんを、この本の詩について、自らの考えを、書き留めたものとよむという形で発表していただきます。
中西　中西さんの考えに富んだ発表の後は４回生の岩瀬安奈さんをぜひお呼びし、書きしたためたものをご発表いただければと思います。
後藤　安奈さんの考えさせられる発表の後は、インドから日本語を研究されるため日本にお越しになっている研究生のアシマ・メヘターさんに、どうか書きしたためたものを通じて、この本に対する意見や考えを発表していただきますようお願いします。
中西　メーヘターさんの深く胸を打つ考えをきいたあとは、高橋先生にチョードリー先生からのお言葉をお読みいただきます。
後藤　高橋先生、ありがとうございます。さて、これに関連して、今日の討論会におけるこの詩についてヨーギー先生にご意見を頂戴したいと思います。
中西　ヨーギー先生の激励のあとは、小磯先生もよろしければ一言頂ければとおもいます。小磯先生お願いします。
後藤　それでは溝上先生に本日の討論会の終わりに、論評をいただきたく前にお呼びいたします。
後藤　さて、本日は和田幸子先生もおいでくださっています。歓迎いたします、ありがとうございます。さて、和田先生にもこのせっかくの機会ですのでお考えをお聞かせくだされればと、思います。
中西　ありがとうございました。最後に長崎先生に本日の討論会を振り返って、祝辞をお願いしております。本日は皆様お集まりいただきありがとうございました。

この本は現在文化的な交流が遅れている我々にとって、良い契機になるのではないかと思います。インドも原爆を作っていて、それがもたらす恐怖や日本のうけたダメージについて知る良い媒体となり得るでしょう。日本の文学に触れるという意味でも素晴らしいものであり、その熱意にただただ敬服します。より一層インドと日本が手を取り合い仲を深めていけたら良いなと、あらためて思わされ、良い日になりました。（編者注：実際には進行はヒンディー語で行われましたが、ここではそれを日本語に二人が翻訳し直してくれました。）

# “परमाणु बम की छाया में”

## 恐れと救い

高橋　明（Takahashi Akira）

123 編の詩を一度に読むという経験は、私にとって生まれて初めてのことでした。どれか一つでも読まずに、本を閉じることは、何かその読まれなかった詩に対して申し訳がない、わかってもわからなくても、ともかくも読まないではどこか落ち着かない気持ちになる、喩えが適切かどうかわかりませんが、道ばたに何体か並んで立っているお地蔵さんがいらしたとして、その内のどれかのお地蔵さんをことさらに除いて、他のお地蔵さんだけに頭を下げるわけにはいかない、というような気持ちで、結局、すべての詩を最後まで読みました。

今、感じていることは、こうした詩を読むことは、とても個人的な体験をする、ということだというものです。もともと、詩を読むということはそういうことかも知れません。しかし、原爆投下とその悲劇という事実については、それから 70 年という長い時間を経た今でも、政治的、社会的、そして歴史的な評価や判断が絡まらざるをえない事柄であることから、余計に、意識して、個人的な体験としてのみ読むべきではないかと思うからでもあります。その意味で、ここに収録された詩が、翻訳者によって序文で述べられているところによれば、「政治臭の強い浅薄な詩を除い」たとあることは、とても大切なことではなかったかと思います。たとえば、原爆の悲劇の責任者として、天皇と日本の軍隊に対して激烈な恨みと呪詛を浴びせることで有名なある日本の漫画がありますが、人間が政治的であることそのものが、原爆の悲劇をもたらした大きな原因であり、そのような漫画は悲劇の再生産をしているだけの事だと考える私のような人間にとっては、訳者のみなさんのこの選択は、とてもありがたいことでした。

よく言われてきたことですが、政治は人間を単なる「数」に貶めます。政治の中では、人間は大勢の中の一人になります。政治的な集会で 100 万人が集まれば、一人のかけがえのない人間の価値は、百万分の一になります。ところが、『原子爆弾の下で』は、一つ一つの詩、その一行一行、言葉の一つ一つが、一人の読者である私に呼びかけてきました。私はそれらの一つ一つの声に、向かい合うよう努めざるをえませんでした。政治的にひとくくりに、ひとまとめに、数として、簡単な結論、簡単なスローガンに要約することのできない、心からの言葉と向かい合うことができたことに、お二人の訳者に感

謝します。「政治臭の強い浅薄な詩」が、いち早く詩としての命を失ってしまっているだろうことを考えれば、この翻訳詩集はこれからも原爆詩の翻訳として、長くその命を保つことを私は確信しています。

さて、これらの詩を読んだ後に、今残っている私個人の感情は、とても一言では言えません。可哀想に、気の毒に、哀れにも、痛ましくもあり、もしこれが自分に起こったことならば、また自分の家族や親しい人たちに起こったことならば、自分は一体どうしていただろう、という混乱した気持ちが絡み合い、ほどけないままに沈んでいく思いです。結局の所、何か一つの答えはないのではないかと思うのです。それほどの、大きく取り返しのつかない悲劇、事実、悲しみであったと思うのです。そもそも、優れた文学とは、何らかの悲劇や喜劇に対して、何かの答えを与えるものではなく、逆に読む者を混乱に陥れるべきものだと、私は考えています。その意味でも、『原子爆弾の下で』は、読者に答えの出ない、出るはずのない、人間とはそもそも何者なのか、という問いに向かい合うことを求める優れた文学作品だと思います。しかも、その根源的な問いを、日本語からヒンディー語という異国語に見事に移しえた貴重な試みであると考えます。

とはいえ、今度はまるで逆のことを言うようですが、人間は政治的であることから逃れられない存在でもあります。一人一人を見れば孤独な人間も、百万人集まれば、歴史を変えるとてつもない力を持つことが可能となります。人間とは社会的な存在としてしかあり得ないものだとすれば、同時にその存在自体が政治的なものであらざるをえません。その上で、個人的でもあり、同時に、社会的かつ政治的でもあろうとすることは、自分や自分の家族、親しい人間たちを原子爆弾の悲劇から守るために、個人の限界を超えて、一体どうすれば良いのかという問いに答えることだと思います。

今の私が恐れていることは、この日本に、この日本のどこかの町に再び原爆が落とされることが今にもあるのではないのか、ということです。日本を取り囲む、アメリカ、ロシア、中国、北朝鮮に原爆があります。ということは、私の周りに、私を殺そうとする意志と能力を持った国と人間たちが存在していることに他なりません。70 年前に、原爆で無辜の民を殺傷するという決断をしたのが、私と同じ人類の一部であったのであれば、これからも同じ決断をする人類の一部が現れても何の不思議はありません。その恐ろしい決断をする人間の私もまぎれもない、一人です。

そうであればこそ、原爆というこの上もなく恐ろしい、人間の手に余る危険なオモチャを人間は持つべきでありません。人間への災厄はかつては自然が与えるものだけであった時代もあったのでしょう。しかし、今は人間にとっての最悪の災いをもたらすものが人間であるという時代に、私たちは生きています。一方で、戦争をこの世からなくすことは絶対に不可能なことだと、私は考えています。また、時にはやむなく戦い、殺し合わざるを得ないことも、あり得る選択だと私は考えます。だからこそ、せめてものこととして時に戦わざるを得ない存在である私たちは、子供や家族、誤解を恐れずに言えば、女子供の、そして無辜の民を巻き添えにすることのないように努力をすべきだと思

うのです。原爆は、生身の、本来裸の人間が持つべき武器の限度を超えています。その意味で、私は核兵器に反対します。しかし、如何に反対をしようとも、将来にわたって核兵器廃絶が現実問題として実現しえないのであれば、あるいは少なくともこれから10年、20年の間に核兵器を失くすことができないとしましょう。一方、日本のどこかの町に再び核爆弾が落とされる危険が、今この瞬間、あるいは明日、明後日にもあるかもしれないという危険があるとすれば、それを座視する勇気は私にはありません。その場合は、日本自身が核兵器を持つ可能性についても考えざるをえないと思います。私も、原爆というおよそ非人間的な武器を実際に使用した人間たちに憤りと憎しみを感じています。しかし、同時に、あわれな、罪のない、愛しい人類の子供たちを再びこのような目に遭わせないために、たとえそれが原爆という恐ろしい武器であっても、それを持つことで彼らを守ることができるのであれば、その武器を手にしたいと思います。自分でこう言いながら、自分の言葉の恐ろしさに私も気づいています。しかし、この恐ろしい矛盾の中で生きている自分自身を見つめる時、私に答えは見つかりません。一体、私たちはどうすればいいのでしょうか。『原子爆弾の下で』は、私にとって、答えのない、根源的な問いとしていつまでも私の前にあるものとなりました。

答えではありませんが、これらの原爆についての詩の至る所に、私は救いがあることにも気づきました。それは、この詩の中に人間の善意と優しさが満ち溢れているという発見です。いや、発見という大げさな言葉を使わなくとも、この本の中のどの詩を読んでも、誰もが気が付くことだと思います。一つだけ、例を挙げてみます。中原澄子さんの、काश! मैं अपने घर उराकामि लौट सकती (p.149) という少し長い詩です。散文詩と言った方が良いかもしれません。想像するに、被爆者のいちやましげるさんという方が詩人の中原さんに語った体験を基に、詩を書かれたようです。みなさんもお読みになったかも知れませんが、私の手元には今、日本語の原文がありませんので、試みにヒンディー語から日本語にその一部を再翻訳をしてみました。

（セミナーでは、『原子爆弾の下で』に収録された中原澄子さんの詩のヒンディー語訳からさらに日本語へと翻訳したものを配布しましたが、その後、中原さんの書かれた詩集を入手して、原作に触れることができました。そうなってみれば、ここで私の下手な訳をお見せする必要もありません。私の残りの文章をさっさと終わらせて、中原さんの原文の該当部分と『原子爆弾の下で』の対応部分とを引用の形でここに紹介して、原作と翻訳の両方の素晴らしさを実感していただくこととしました。）

もう、私から何も注釈をつける必要はないでしょう。ここにあるのは、ひたむきな人間の善としか言い様のないものです。地獄のような世界の中で、人はここまで優しくなれるものなのでしょうか。原爆投下は大きな悲劇でした。今に続く悲劇です。し

かし、その悲劇の中にあって、これだけの優しさをこの人たちは今の私たちに残してくれました。最初に、私がこの中の詩のすべてが私たちに呼びかけていると書きましたが、その声はかくも、慈愛に満ち満ちた、優しい声でした。怒りもあります。激しい怒りもあります。しかし、そこにもその底には人間に対する信頼があります。

私は自分の大切な人たちを守るために、原爆という武器をわれわれも所有すべきではないかと、ついさきほど言ったばかりです。しかし、その原爆の惨禍を体験した人たちがもっていた人間としての優しさを、私は失っているのかもしれません。もう一度、最後に申しますと、私はどうすればよいのか、本当にわからないのです。答えがどこにあるのか。

（平成 28 年 12 月 8 日、配布文書より）

中原澄子さんの詩です。

## うらかみ　ん　いえに　かえり　たか・・・・

### ―――爆心から三・二キロ　飽の浦　市山繁さん

徴用で長崎に行ったっですな　昭和十八年の三月
飽(あく)の浦ん三菱造船所ん機械科に入れられて鍛えられたっ
寮は福田寮ていうふとか寮じゃったっ
そこにゃ朝鮮人も相当に入れられとったっですばい
日本語ば言わんばおごられよったっ

わしゃそっから工場まで一キロぐらい歩いて通いよったなあ
八月九日　わしゃ運(ふ)のよかったあ

飽の浦ん防空壕がまたそうりゃ太かったっ
わしらん脱衣箱が中に十二ばっか並べてあって
そいで煙草のバット十本入りの配給の煙草ば一本にぎって
階段ば一段上がったとこっで
エンジンのスイッチで　こう煙草に火ばつけようてしよったっ
そん時　光ば二回見たっ

マッチのなかったし
あいや　エンジンに火の走ったっかて　びっくりしたっ
原爆ん光て　すぐわかったっ

工場の天井は厚かガラスじゃっで
そいの　バラバラボロボロ落ちてしもうて
帽子はかぶっとるばって　むき出しん腕とか首とかに
太かガラスやら粉ごなん破片の刺さって
血ば流し流し　トンネルん方に走りよる
飽の浦んトンネルは山に向いとっと
一〇〇メーターばっかりん長かとのあっと
みんなそこに
造船所ん方からも　わあって　逃げこんだっ
天気のよかった日じゃった

もう無断でみんな帰りよっと

わしも帰ろうて考えて班長に言いに行ったっ
そん人は宮崎の人　わしと二人同室じゃったっ
こん人の「残ってくれ　残ってほしか」て

仕事ちゅたっちゃもう
遺体片付けばっかり
遺体ば箱に詰めてトラックに乗せて運んでくる

上から降ろすもん　下から受けとるもん
下から受けとるとの五、六人おったっ
わしゃ下から受けとる方　二人か三人かで組んで

血のすたすた流れてじゃんなあ
怪我人の血ばうけながらなあ
そいが　そうにゃ　重かっ

わしゃそういう仕事ばして一週間働いたっ
もうどこんだれじゃいわからん人の
血ばすたすた受けながら

三菱病院ていうふとか病院の飽の浦にゃあったっ
そこに原爆でやられた人ば
あっちこっちからトラックで運んで来たっ

今でん忘れられん
高等女学校ぐらいん体格のよか女の子じゃった
ひどか火傷(やけど)ばしとらしたっ
わしん顔に向けて
「うらかみ　ん　いえに　かえり　たか・・・・」て
ふくれた口の　そがん言いよらすごたった

飽の浦の工場にリヤカーのあったとば引いて来たっ
そん子ばリヤカーにのせて浦上ん方に行くていうたっちゃ
そん方角は　もうずうとやられてしもうて
家はなか　道もなかて　わしゃわかとったっ

そっで　稲佐山んすそに沿うて行こうてするばって
家はびしゃげとる　道て言わるる所のなかっ
そっで　太か石ば押しやったりしいしい
山ん方んすこしでん平(たい)らか所ばみつけて
ぐるっともうて行ったばって
ひょこっとリヤカーの重うして動かんごとなったっ
えらい重いかて　わしが見てみたら
タイヤのパンクしとっと

ばってどがんすっか

家はもうなかてわかっとってん
こん娘(こ)は家に帰りたしゃしとる
挺身隊で飽の浦に来とったっ　こん娘は
そがん思い思いタイヤのびしゃげたリヤカーば
ガタガタ引いてちっとずつ上(かみ)ん方に行くしか　なかっ

どこから来らしたっか
灰かぐらのごたる両親二人と出会うたっ

リヤカーん娘(こ)のすぐわからしたっ
深ぶかと頭ば下げらして
唐芋(からいも)ども　ちゃっとくれらしたっ

ちょうど昼ごろやったもん　出会うたとは
わしは唐芋ばいっちょもろうて
そして食いながら工場ん方に歩いたっ
そん唐芋はわが子に食わせらすつもりじゃなかったっかて
あとで　そがん思うて　情けなかった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（詩はまだ続きますが、引用はここまでとします。中原澄子詩集『長崎を最後にせんば――原爆被災の記憶』改訂版　2009 年　コールサック社, p.56-66）

続いて、『原子爆弾の下で』からヒンディー語による翻訳を引用します。

# काश! मैं अपने घर उराकामि लौट सकती

...अवकेंद्र से 3.2 किलो मीटर की दूरी पर,
अकुनोउरा (स्थान का नाम),
श्री इचियामा शिगेरु (अपने अनुभव बताने वाले का नाम)

मुझे सरकार के आदेश पर काम करने नागासाकी जाना पड़ा
मार्च 1943 में
अकुनोउरा में स्थित मित्सुबिशि पोतनिर्माणशाला के मशीन विभाग में
मेरी भरती हुई और वहाँ मुझे सख्त ट्रेनिंग दी गई
फुकुदा रयो नामक हमारा होस्टल बहुत बड़ा होस्टल था
वहाँ अनेक कोरियाई लोग भी भरती किए गए थे

वे लोग जापानी भाषा न बोल पाने पर डाँट खाते थे

मैं वहाँ से कारख़ाने तक लगभग एक किलोमीटर रोज़ पैदल जाता था
नौ अगस्त, मैं खुशकिस्मत था
अकुनोउरा का हवाई शरण –स्थल भी बहुत विशाल था
हमारे कपड़े रखने के लिए बारह बक्से सजाए गए थे
और मैं राशन में मिले चमगादड़-छाप सिगरेट के पैकेट से एक सिगरेट निकालते हुए
एक सीढ़ी चढ़कर इंजन के स्विच से सिगरेट सुलगाने ही वाला था
दो बार बहुत तेज़ कौंधों से मेरी आँखें चौंधिया गईं
माचिस भी नहीं थी,
ओह, इंजन में आग लग गई ? मैं चकित रह गया
यह परमाणु बम की कौंध है, मैं तुरंत समझ गया
कारख़ाने की भीतरी छत पर मोटे-मोटे शीशे लगे थे
वे टुकड़े-टुकड़े होकर नीचे आ गिरे
सिर पर टोपी थी, पर हमारी नंगी बाँहों और गर्दनों पर
अनेकानेक छोटी-बड़ी किरचें चुभ गईं
ख़ून से लथपथ लोग सुरंग की तरफ़ भागने लगे
अकुनोउरा की सुरंग पहाड़ की ओर थी
वह लगभग एक सौ मीटर लंबी थी
सब लोग
पोतनिर्माणशाला से भी एकाएक उधर भागे
उस दिन आसमान साफ़ था

अब सब लोग बिना अनुमति घर लौटने लगे

मैं भी लौटने का इरादा करके ग्रुप लीडर को कहने गया

हमारे ग्रुप लीडर मियाज़ाकि जनपद से थे और होस्टल में
हम दोनों एक ही कमरे में रहते थे
उन्होंने कहा, 'तुम वापस मत जाओ, मेरा निवेदन है, यहीं रुको'

काम ही क्या था
लाशें समेटना, बस
लाशों को बक्सों में बंद करके उन्हें लॉरी में लादना था
ऊपरवाले बक्से उतारते थे और नीचेवाले लपकते थे
ऊपर-नीचे दोनों मिलाकर पाँच –छः आदमी थे
मैं नीचे वाली टोली में था, दो-तीन आदमियों की एक टोली थी

छर्र छर्र ख़ून बह रहा था
हमारी देह ज़ख़्मी लोगों के ख़ून से लिथड़ गईं
बक्से बहुत ज़्यादा भारी थे
मैं एक सप्ताह इसी तरह काम करता रहा
बिना जान-पहचान के लोगों के ख़ून से लथपथ होकर

मित्सुबिशि अस्पताल नामक एक बहुत बड़ा अस्पताल अकुनोउरा में था
जो लोग परमाणु बम के शिकार हुए
उन्हें भिन्न-भिन्न स्थानों से हम लॉरी में लादकर वहाँ ले आते थे

मैं अब भी भूल नहीं सकता
शायद वह गर्ल्स हाई स्कूल की छात्रा थी, हट्टी-कट्टी देह वाली
वह बुरी तरह झुलस गयी थी
उसने मेरी तरफ़ देखा और
सूजे हुए मुँह से इतना ही कहा

‘काश! मैं अपने घर उराकामि लौट सकती’

अकुनोउरा के कारख़ाने से मैं एक ठेला ले आया
मैंने उसको ठेले पर बिठाकर उराकामि की तरफ़ जाने का इरादा किया
हालांकि उधर सब-कुछ ध्वस्त हो चुका था
घर नहीं, रास्ते भी नहीं, मुझे अच्छी तरह मालूम था

इसलिए मैंने इनासायामा पहाड़ के दामन  के किनारे होकर जाना चाहा
लेकिन उधर घर तबाह हो चुके थे, जो रास्ता मिलना चाहिए था वह नहीं मिला
इसलिए मैं बड़े बड़े पत्थरों को हटाते हुए
पहाड़ की ओर कुछ समतल जगह ढूँढ़
लंबा चक्कर लगाकर चलता रहा
फिर, एकाएक ठेला इतना भारी हो गया कि मुझ से टस से मस न हुआ
आख़िर इतना भारी क्यों?
मैंने देखा
एक टायर पंक्चर हो गया था

फिर अब क्या किया जाए
उसका घर अब कहीं नहीं था
यह जानते हुए भी लड़की घर लौटने को तरस रही थी
स्वयंसेविका दल में भरती होकर अकुनोउरा आयी हुई थी वह लड़की
मैंने ऐसा सोचा, मेरे लिए फटे हुए टायर वाले ठेले को धड़धड़ घसीटते हुए
थोड़ा-थोड़ा करके ऊपर जाने के सिवा और क्या चारा था

न जाने वे दोनों कहाँ से आए
धूल और राख में लिथड़े उसके माता-पिता से मुलाक़ात हुई

माता-पिता ने ठेले में बैठी अपनी बेटी तुरंत पहचान ली

दोनों ने पूरी तरह सिर झुकाकर
शिष्टतापूर्वक मुझे शकरकंद भेंट की

दोपहर का समय था जब हमारी मुलाक़ात हुई
मैं एक शकरकंद लेकर
उसे खाते हुए कारख़ाने की ओर चलने लगा
माता-पिता ने उस शकरकंद को कहीं अपनी बेटी को खिलाने के लिए
तो नहीं सहेज रखा था?
बाद में सोचकर मुझे बड़ी ग्लानि हुई

.....

(कविता अभी जारी है, लेकिन उद्धरण यहाँ पर समाप्त करता हूँ। `काश! मैं अपने घर उराकामि लौट सकती`, नाकाहारा सुमिको, पृष्ठ, 149-154, *परमाणु बम की छाया में*, साहित्य अकादेमी,दिल्ली)

セミナーの写真を紹介します。撮影者はヒンディー語専攻 3 年生の中西渉さんです。

司会者　左から　中西優紀子さん、後藤大輝さん

左から、一人おいて、三木雄一郎先生、溝上富夫先生

Chaitanya Prakash Yogi 先生

Ashima Mehta さん

参加者の 3 年生の日高航洋さん

小磯千尋先生と三木先生
机上の花は松木園先生から

# おわりに

セミナーの成果については本報告書をご覧いただくとして、いくつかご留意いただきたい点についてお断りいたします。本来でしたら、すべての文章について日本語とヒンディー語の両方のバージョンを用意すべきところでしたが、そこまで編者の力が及びませんでした。チョードリー氏、ヨーギー氏、メヘター氏からいただいた発表原稿については、今回の報告書のために高橋がヒンディー語から日本語に翻訳をしました。三木雄一郎氏の発表は日本語で行われましたが、本報告書には三木氏がヒンディー語に翻訳された文章を掲載することができました。

また、今回の報告書には収録できませんでしたが、翻訳をお読みいただいて直接または間接に読後の感想を届けていただいた多くの皆様にお礼を申し上げます。さらに当日参加した学生諸君にも感謝しています。ヒンディー語専攻の学生諸君にとって、本報告書が今後の勉学の励みになる事を願っています。

なお、この報告書の再配布、頒布等に関しては、その内容に変更を加えない限り、制限は設けておりません。『原子爆弾の下で』の翻訳刊行の意義について、少しでも多くの方々に知っていただくことができれば幸いです。

最後に、今回、セミナーを開催し、また報告書としてとりまとめて皆様にご紹介することができた背景には、私たちにとっての学問と人生の恩師でいらっしゃる
古賀勝郎先生のお導きがあったことを感謝を込めて記します。

平成 29 年 5 月 5 日

高橋 明
atultakahasi@gmail.com